

- 基本計画の名称：高岡市中心市街地活性化基本計画
- 作成主体：富山県高岡市
- 計画期間：平成29年4月～平成34年3月（計画期間5年）

1. 中心市街地の活性化に関する基本的な方針

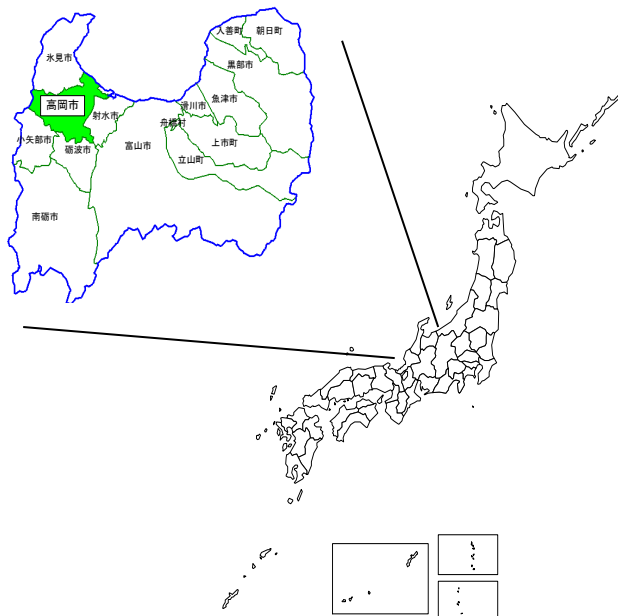
〔1〕 高岡市の概要

高岡市は、富山県北西部に位置し、人口約17万人を有する県内第2の都市である。平成27年3月に北陸新幹線が開業し東京と最短で2時間21分で結ばれたほか、鉄道では、あいの風とやま鉄道線、JR城端線・氷見線及び路面電車万葉線が、道路網では、西部に能越自動車道の3つのIC、南部に北陸自動車道のスマートICがあり、北陸の大動脈である国道8号と156号、160号が交わる交通結節点に位置し、通勤・通学、商業など県西部の中核的な都市である。

歴史上、県内で最も古くから開拓された地域で、奈良時代には越中国府が置かれ、天平18年には奈良時代の代表的歌人である大伴家持が国守として当地に赴任し、在任5年の間に二上山や雨晴海岸（国名勝「おくのほそ道の風景地―有磯海―」）などの風光明媚を愛でて詠んだ220首余りの秀歌を万葉集に残している。

近世に入って加賀前田家2代当主前田利長が関野ヶ原（現在の高岡台地）に築城し、城下町として現在の高岡市の基礎が築かれることとなった。一国一城令により高岡城は廃城となったが、3代当主前田利常が商工業振興策を進め、武家のまちから商工業を中心とする町人のまちとして発展し、銅器、漆器、仏壇、仏具などの伝統産業を生み出した。また、ユネスコ無形文化遺産に登録された国の重要有形・無形民俗文化財である高岡御車山祭をはじめ、県内唯一の国宝である瑞龍寺、勝興寺、氣多神社、菅野家・武田家・佐伯家住宅など数多くの重要文化財、前田利長墓所・高岡城跡（国指定史跡）、高岡鋳物の製作用具及び製品（登録有形民俗文化財）、山町筋・金屋町（重要伝統的建造物群保存地区）など県内でも有数の歴史的・文化的資産が集積している。

明治以降は伏木港の発展とともに重化学工業、木材・紙・パルプなどの工業集積が形成され、戦後になると伝統的な高岡の金属工業はアルミ産業へと発展し、全国有数の一大産地を形成したほか、近年は伝統産業の技法を活かした日用工芸品「クラフト」が全国的な注目を集めるなど、高岡市は日本海側有数の産業都市として発展し、現在に至っている。



〔2〕 高岡市中心市街地の状況

（1）位置

高岡市の中心市街地は、高岡駅を中心とする一帯の市街地である。

歴史・文化を受け継ぐとともに産業、行政の様々な都市機能を担い、まさに「高岡の顔」として発展してきた地域である。

位 置 図



（2）中心市街地の特徴と有効活用の方法の検討

①歴史・文化資産

高岡市の中心市街地は、慶長14年（1609）、加賀前田家2代当主前田利長の隠居場所として高岡城が築城され、城下町として町建てられたところに起源をもつ。城に続く台地上に馬場や武家屋敷が置かれ、台地下には商人町が配置されるとともに、千保川沿いに開かれた金屋町では招致された鋳物師による職人町が形成され、高岡市の原形が形づくられることとなった。本市中心市街地は、いわば近世高岡発祥の地、高岡市の原点としての性格を有している。

このように、近世における町の発展が明治以降も続き、商工業の発達とともに近代から現在に至る町並みが形成されてきた。

また、戦災の影響がなかったことから、現在でも中心市街地には、瑞龍寺（国宝）、山町筋・金屋町（重要伝統的建造物群保存地区）、高岡城跡[高岡古城公園]（国指定史跡）や高岡御車山祭（ユネスコ無形文化遺産、重要有形・無形民俗文化財）といった伝統行事など数多くの歴史・文化資産が集積しており、富山県内では他に類を見ない状況である。

国指定文化財・国登録有形文化財等の状況

	国宝	重要文化財	重要伝統的建造物群保存地区	登録有形（民族）文化財
中心市街地内	1	10	2	13
その他高岡市内	0	13	0	24
高岡市 計	1	23	2	37
（県内順位）	（1）	（2）	（1）	（1）
富山県 合計	1	106	4	112
中心市街地／高岡市	100%	43.5%	100%	35.1%
中心市街地／富山県	100%	9.4%	50.0%	11.6%

出典：
富山県文化財・文化施設等一覧
（H28.3.15 現在）

中心市街地における歴史・文化資産の分布状況



これらの歴史・文化資産は、中心市街地内の主要観光拠点として、年間約 130 万人の観光客が訪れ、高岡市における観光交流拠点として重要な役割を担っている。

これらの歴史・文化資産を磨き、魅力高めるとともに、まちなかを回遊する取り組みを進める必要がある。

とりわけ、平成 23 年 6 月に国の認定を受けた高岡市歴史的風致維持向上計画や平成 27 年 4 月に認定を受けた「日本遺産」及び平成 28 年 12 月に登録された「ユネスコ無形文化遺産」の取り組みと一体となった、中心市街地活性化の取り組みが重要である。



瑞龍寺
〔国宝 3 棟、重要文化財 7 棟他〕



高岡御車山祭
〔重要有形・無形民俗文化財〕



高岡城跡（高岡古城公園）
〔国指定文史跡〕

②社会資本など

高岡市は非戦災都市であることから、前述した歴史・文化資産のみならず、字名や条里など、中心市街地には開町時の町建ての雰囲気が色濃く残っている。

本市では、都市基盤の充実を図るため、中心市街地において様々な社会資本の整備に取り組んできた。特に、市民会館、市立博物館、市民体育館の設置をはじめ、ウイング・ウイング高岡（市立中央図書館、生涯学習センターなどが入居）などに代表される再開発事業を行い、多くの公共・公益施設が集積する拠点としての性格を確立するに至っている。

また、市全体の発展に伴って高岡駅北側の末広町、御旅屋通り、末広坂等の商店街が形成され、長年にわたり中心的な商店街として位置づけられてきた。そのクロスポイントに位置する御旅屋セリオ〔核店舗：大和高岡店（呉西地域唯一の百貨店）〕とともに、高岡の商業を代表するエリアとなっている。

また、公共交通の拠点として、高岡駅（あいの風とやま鉄道線、ＪＲ城端線・氷見線、万葉線）、バスターミナルが立地するとともに、平成 23 年 8 月に高岡駅の橋上駅舎化、南北自由通路〔通称：万葉ロード〕が供用開始されたことによって、鉄道によって分断されていた駅南北が地上で連結されることとなった。さらに、平成 26 年 3 月に交通広場、北口駅前広場、新しいステーションビル（クルン高岡）等が供用開始されたことにより拠点機能が一層高まり、市民のみならず周辺都市をも含めた人の流れが活発化し、中心市街地が交流拠点として富山県西部地域全体の発展に寄与することが期待されている。

このような都市基盤と多様な都市機能が集積し、ストックされてきた中心市街地において、これらの既存ストックを活かしつつ、中心商店街と連携を図り、また、まちづくり会社や街づくり協議会といった多様なまちづくり機関の活動を助長しながら様々な施策・事業に取り組むことは、高岡らしい賑わいと活力に溢れたまちなかを創出するものであり、中心市街地の活性化にとって有効な取り組みである。



御旅屋第一街区市街地再開発事業
〔御旅屋セリオ（大和高岡店など）〕



駅前西第一街区市街地再開発事業
〔ウイング・ウイング高岡〕

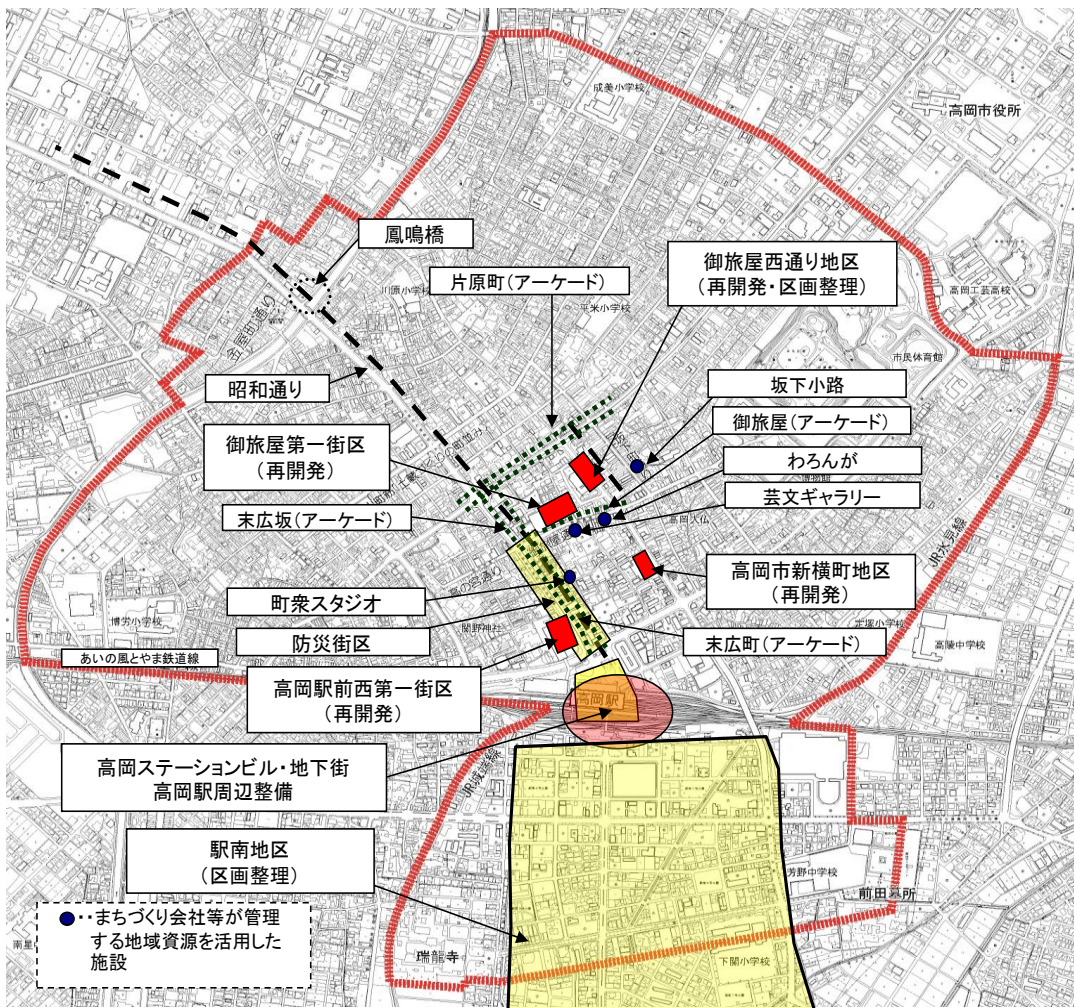


高岡駅南北自由通路
〔通称：万葉ロード〕

高岡駅周辺整備事業



主な社会資本整備等の分布状況



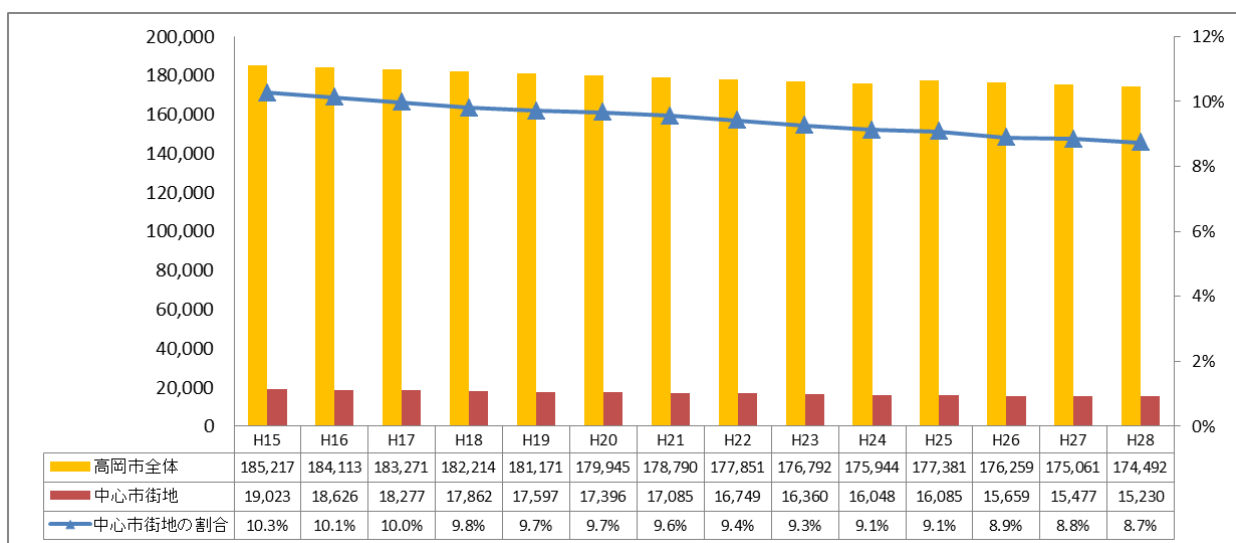
(3) データから見た中心市街地の現状

① 人口・世帯数の状況

高岡市全体の人口が減少する中、中心市街地の人口は市全体を上回るペースでの減少が続いており、全市に対する中心市街地の人口割合は、前計画がスタートした平成 24 年時点と比較しても 0.4 ポイント低下の 8.7% となった。

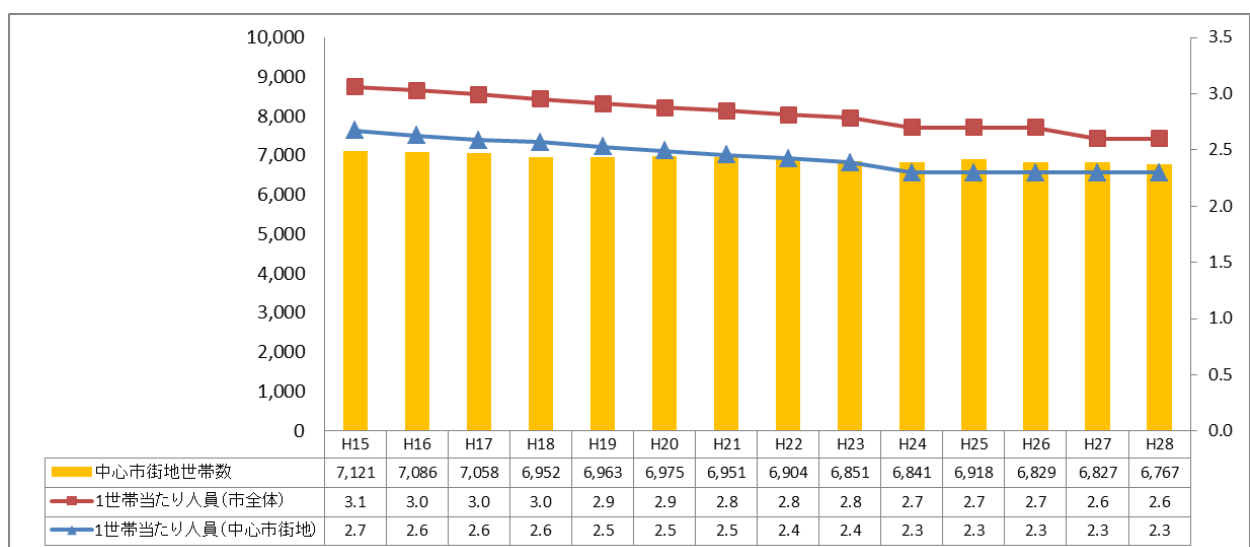
中心市街地の世帯数については、平成 24 年と比較して 1.1% の減少となっているが、一世帯あたりの人員数は近年 2.3 人で推移している。なお、高岡市全体の 2.6 人と比較して 1 世帯当たりの人員数が少なく、核家族化、単独世帯化の傾向であることがわかる。

中心市街地の人口推移



出典：住民基本台帳（各年 3.31 現在） 平成 17 年までは旧高岡市と旧福岡町の合計

中心市街地の世帯推移

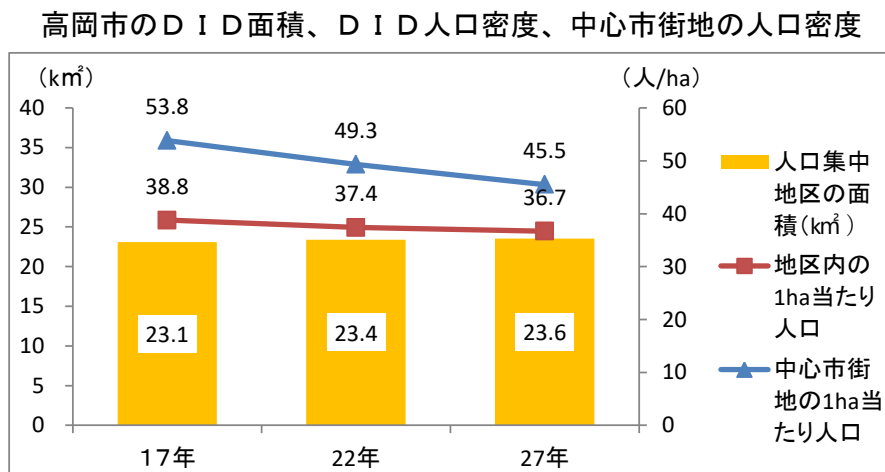


出典：住民基本台帳（各年 3.31 現在） 平成 17 年までは旧高岡市と旧福岡町の合計

②人口密度

郊外居住の進展により、高岡市のD I D（人口集中地区）面積は平成2年の14.8 km²から平成27年には23.6 km²に拡大した。特に、平成12～17の5年間でD I D面積は1.3倍となり市街地の拡大が進んだ一方で、D I D面積1 ha当りの人口密度は平成2年の50.8人から平成17年には38.8人に低下した。平成17年以降は市街地拡散のペースが大幅に鈍化したものの、D I D面積1 ha当りの人口密度は36.7人となり、人口密度は低下を続けている。

中心市街地の人口密度も、平成22～27年の5年間で3.8ポイント低下しており、人口密度の低下が進んでいる。



出典：総務省「国勢調査」、中心市街地人口は住民基本台帳による

③住宅の状況

富山県の持ち家比率は全国1位であり、持ち家に対する意識の高い地域である。

また、一人あたりの居住室の畳数も、持ち家比率と同様、全国トップクラスである。

これらのことから、県民性として、「広くて大きな家を持ちたい」という意識が強いことが伺われ、県内における人口移動には、住宅の取得が大きく影響を与えているものと推察される。

富山県西部地域における1,000世帯当たりの新設住宅戸数をみると、上述のような志向を反映し、砺波市や射水市においては、地価が比較的安く、まとまった土地が確保しやすいため新規の住宅着工が進んだが、住宅地の平均価格に大きな差がなくなっていることもあり、近年はその差が縮まってきていることが見てとれる。

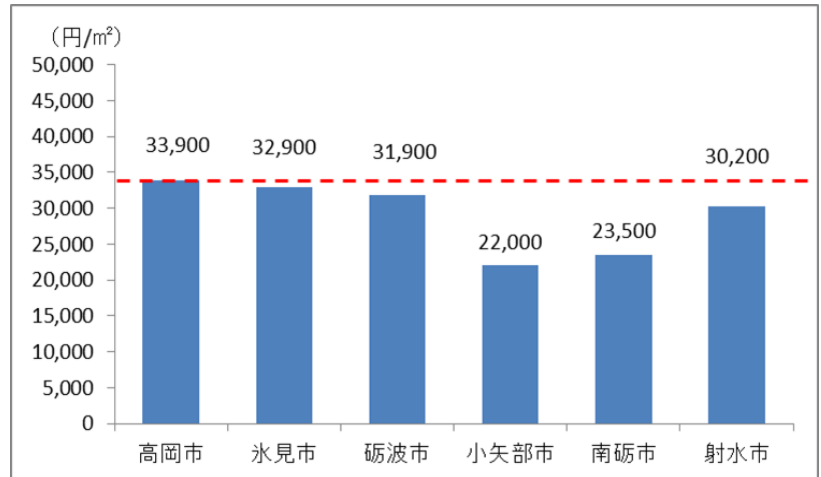
高岡市の1,000世帯当たり新設住宅戸数は、平成18年度、26年度を除き、ほぼ年間15戸前後で推移し、市全体の人口は漸減傾向にある。そうしたトレンドの中、中心市街地の空き家は平成24年で328軒（H24 高岡市都市経営課調査）であり、全市を上回るペースで人口減少及び世帯数の減少が進んでいる。

富山県内各市における持ち家比率

順位		持ち家比率(%)
1	氷見市	92.1
2	南砺市	89.6
3	小矢部市	88.2
4	黒部市	84.1
5	滑川市	83.8
6	射水市	81.4
7	砺波市	79.3
8	魚津市	78.3
9	高岡市	77.3
10	富山市	71.3
	富山県	78.1

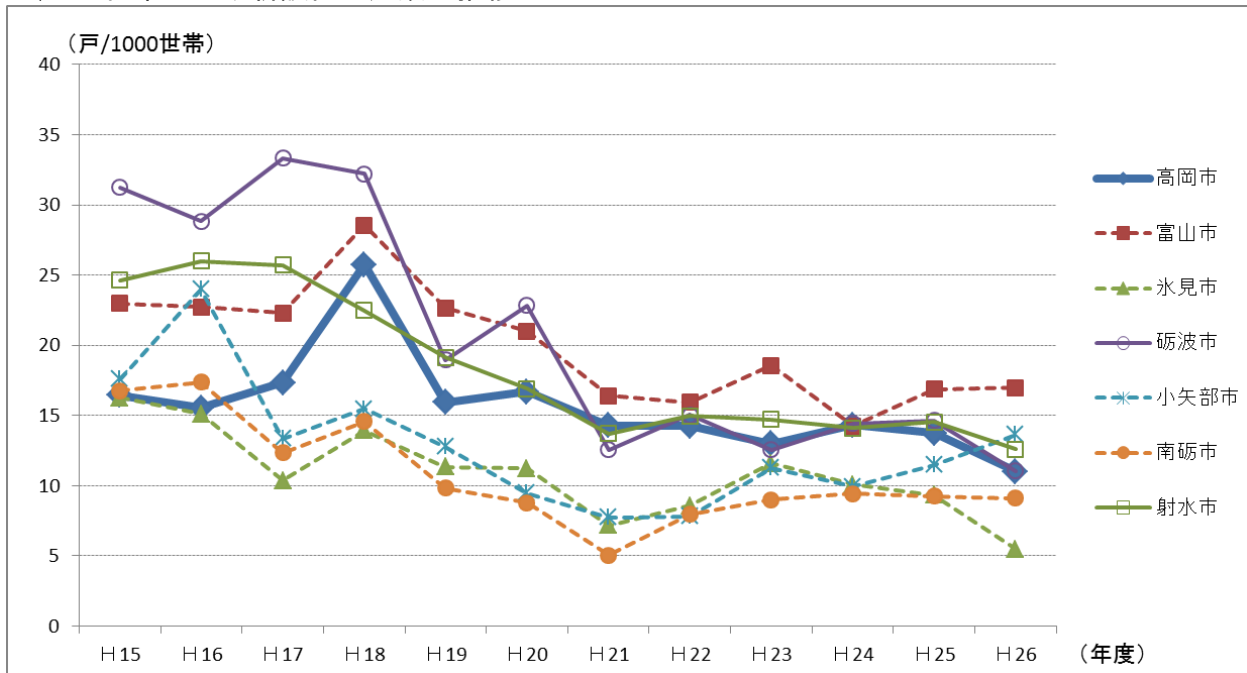
出典：H27 国勢調査
網掛けは富山県西部の都市

富山県西部各市における住宅地平均価格（平成 28 年）



出典：国土交通省地価公示

1,000 世帯当たり新設住宅戸数の推移



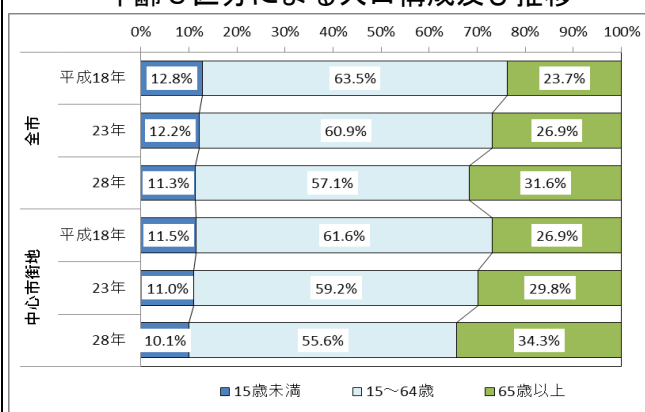
出典：富山県「市町村別新設住宅着工戸数」、富山県「住民基本台帳人口及び世帯数」により作成

④少子高齢化の状況

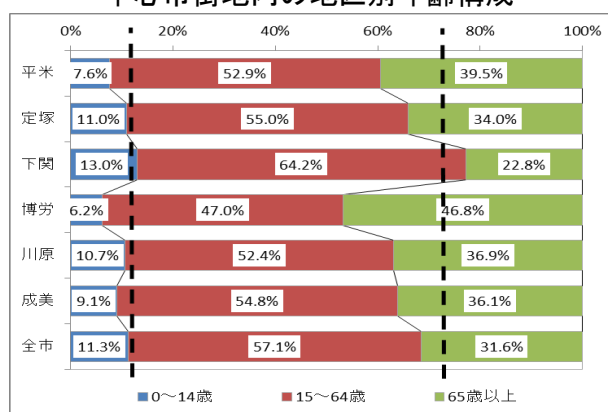
年齢3区分による変化を見てみると、全市、中心市街地ともに年少人口の割合が低下する一方で65歳以上人口の割合は上昇しており、全市的に少子高齢化が進展している。

中心市街地の65歳以上人口の割合は、全体としてみると全市平均の31.6%よりも3ポイント程度高い34.3%になっている。特に、宅地開発が進んだ下関地区を除く地域ではこの割合が高くなっており、高齢化の進展がみられる。

年齢3区分による人口構成及び推移



中心市街地内の地区別年齢構成



出典：住民基本台帳(各年3月31日現在)

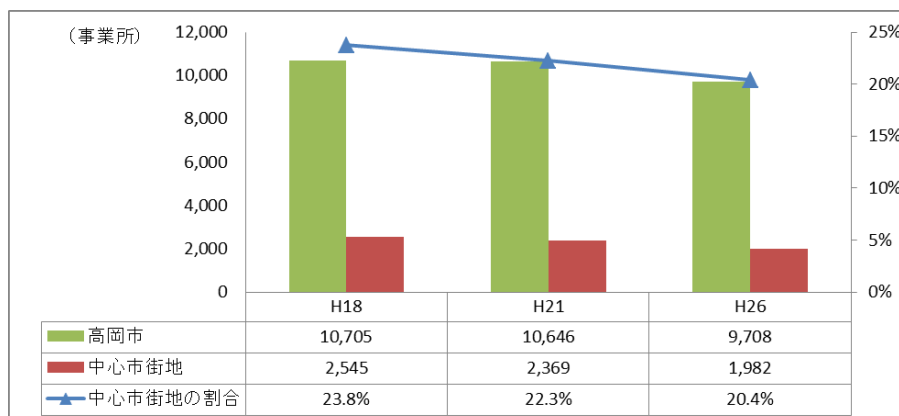
(注) 中心市街地(6地区)の割合は、町丁字による年齢別人口を抽出できないことから、中心市街地におおむね含まれる平米、定塚、下関、博労(木津除く)、川原、成美の6地区の人口から算出

⑤事業所・従業者数(全業種)の状況

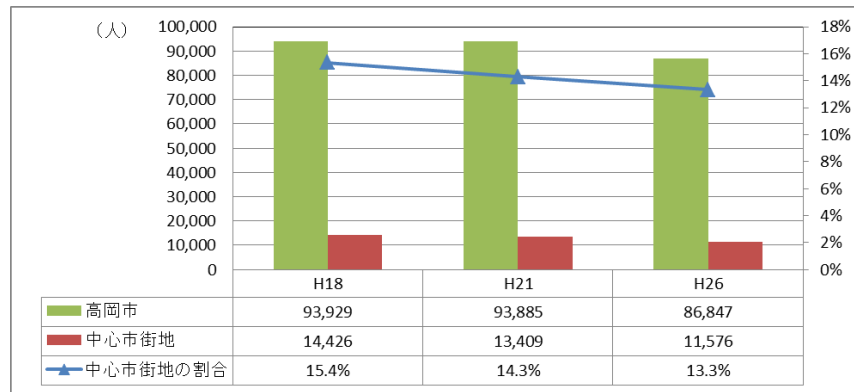
中心市街地における事業所数・従業者数(全業種)は、減少が続いている。

全市における中心市街地のシェアをみると、事業所数、従業者数(全業種)とも引き続き低下しており、中心市街地への集積度が低下していることがわかる。

中心市街地における事業所数(全業種)の推移



中心市街地における従業者数（全業種）の推移



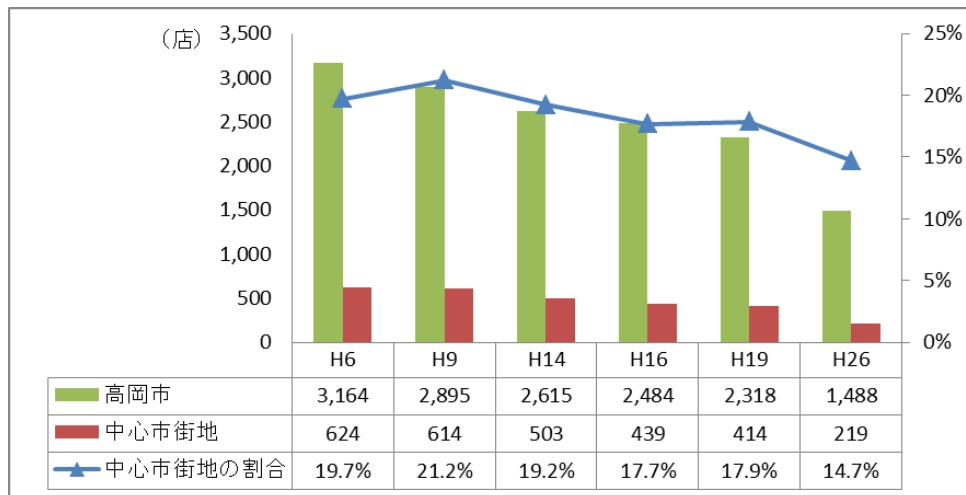
出典：総務省「事業所・企業統計調査」および「経済センサス基礎調査」

（注）中心市街地の数値は、中心市街地内に属する全町丁の合計

⑥商店数（小売業）の状況

商店数は、高岡市全体、中心市街地（商業集積の合計）ともに長期的に減少が続いている。全市における中心市街地のシェアをみると、平成 26 年では 14.7% となっており、平成 19 年と比べて 3.2 ポイント低下し、中心市街地への集積度が低下していることがわかる。

中心市街地における小売業商店数の推移



出典：経済産業省「商業統計」（立地環境特性格集計）

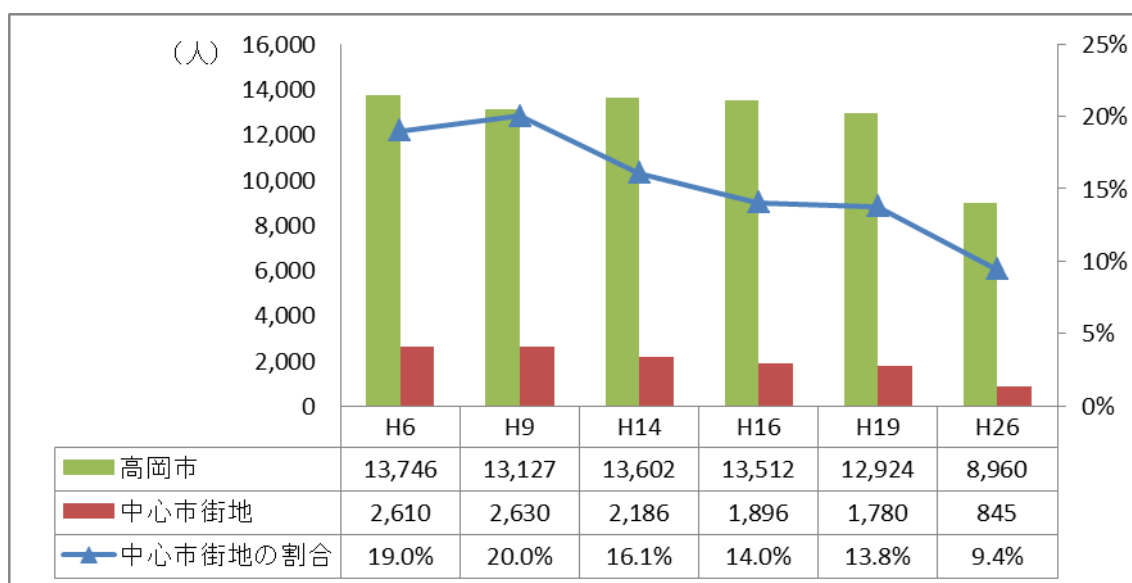
（注）中心市街地内に立地する、坂下町・大仏前通り商店街、ステーションビル商店街（平成 23 年解散）、高岡駅商店街（平成 26 年～）、末広町・恵比須通り商店街、末広坂商店街、片原町商栄会、えんじゅ通り商店街、御旅屋通り商店街、中央通り商店街、高の宮通り商店街（昭和 45 年～）、駅前商店街、旅籠町商店街（昭和 57 年～）、鴨島商店街（昭和 57 年～）、成美商店街（昭和 63 年～）、駅前商店街（昭和 57 年～平成 9 年）、桐木町商店街（昭和 57 年～平成 9 年）の合計で、当該集積内に立地する御旅屋セリオ、高岡サティ（平成 21 年閉店）、クレビ、ダイエー高岡店（平成 9 年閉店）、ユニー高岡店（平成 6 年閉店）、ミズの街（昭和 63 年閉店）を含む数値。なお、平成 16 年までの「高岡市」は旧高岡市と旧福岡町の合計。

⑦従業者数（小売業）の状況

小売業従業者数についても、高岡市全体、中心市街地（商業集積の合計）ともに減少が続いている。

中心市街地（商業集積の合計）については、平成5年10月の高岡サティ開店、平成6年3月の御旅屋セリオ開店により、平成9年に全市に占めるシェアは増加したものの、その後再び減少するに至り、平成26年には、全市に占めるシェアは9.4%となっている。

中心市街地における小売業従業者数の推移

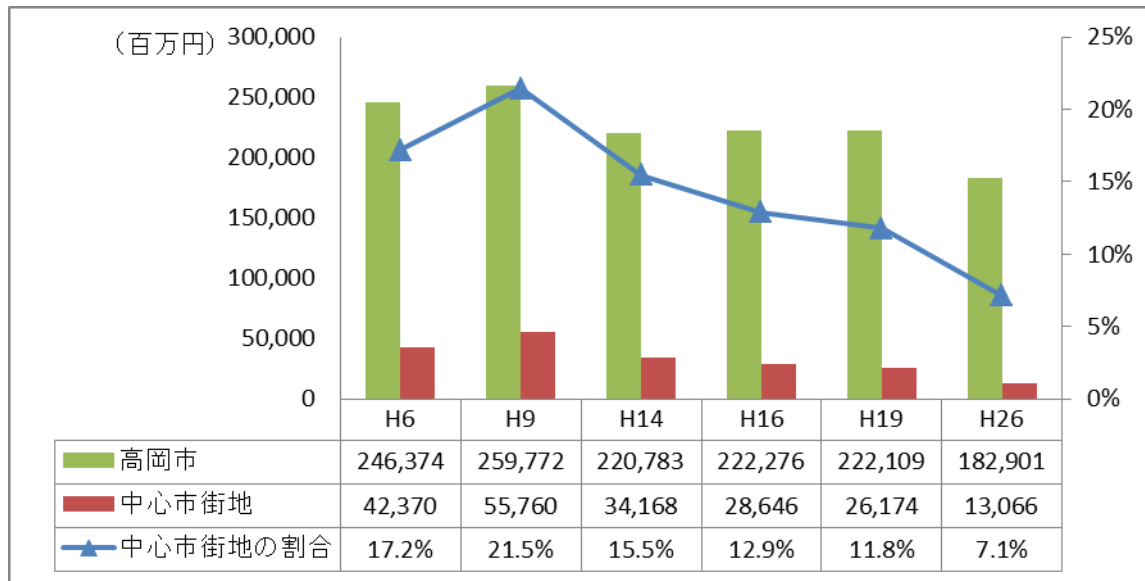


出典：経済産業省「商業統計」（立地環境特性格集計）

⑧年間商品販売額の状況

年間商品販売額は、ここ数年高岡市全体が横這い傾向で推移してきたが、平成26年は平成19年と比べて17.7%低下している。中心市街地では連続減少しており、特に平成26年は平成19年と比べて50.1%低下している。また、全市に占める中心市街地のシェアは7.1%にまで低下、商店数および従業者数の落ち込み割合と同様減少幅が大きなものとなっている。

中心市街地における小売業年間販売額の推移

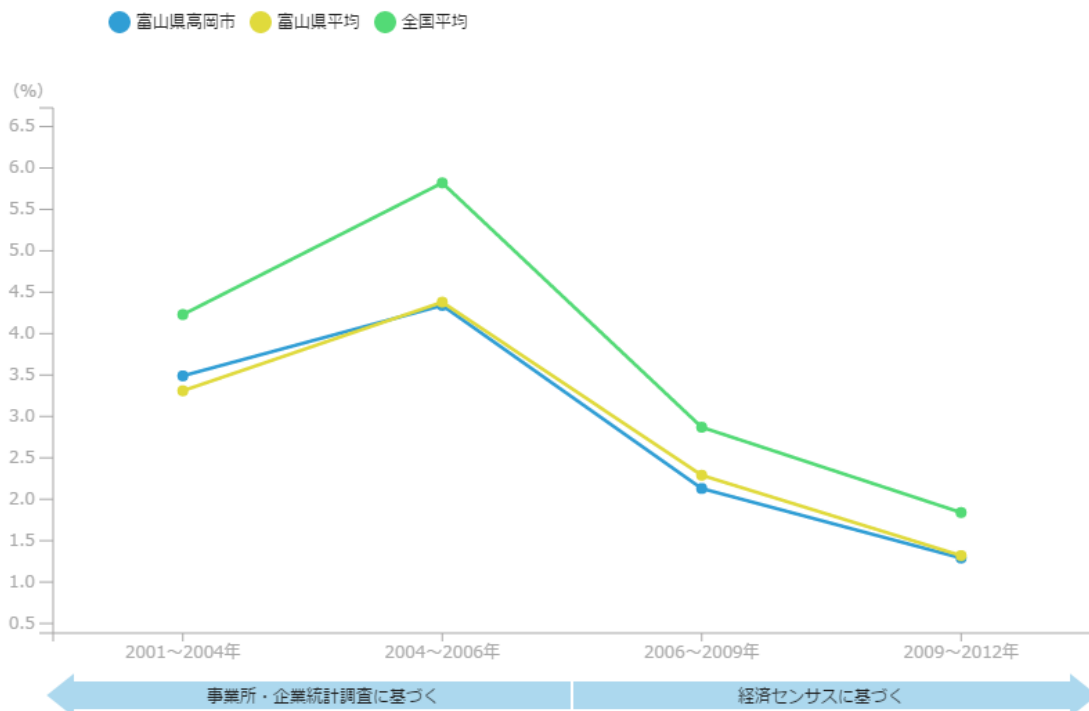


出典：経済産業省「商業統計」（立地環境特性格集計）

⑨創業比率の状況

地域経済分析システム（RESAS）を用いて高岡市の創業比率の推移を見ると、富山県平均及び全国平均とほぼ同様の動きとなっており 2004（平成 16）～2006（平成 18）年以降は下降傾向にある。一方、比率自体は富山県平均とほぼ同水準となっているが、全国平均を下回っている。

創業比率の推移



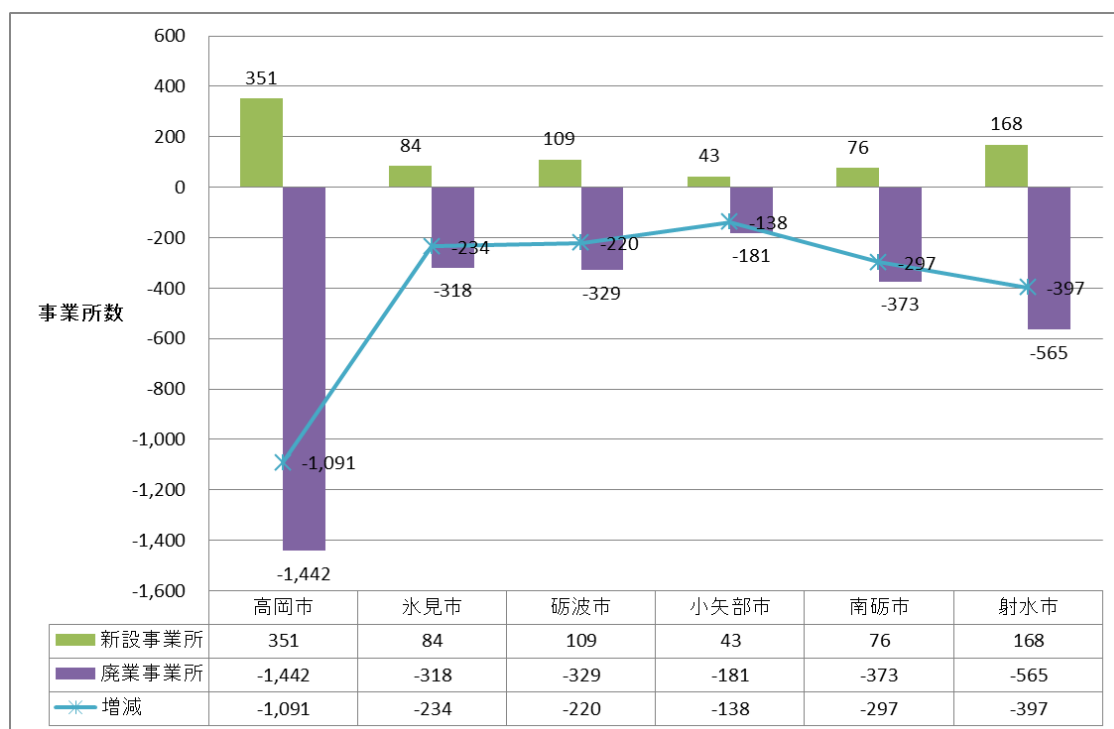
出典：総務省「平成 13 年事業所・企業統計調査」、総務省「平成 16 年事業所・企業統計調査」、総務省「平成 18 年事業所・企業統計調査」、総務省「平成 21 年経済センサス基礎調査」、総務省・経済産業省「平成 24 年経済センサス活動調査」地域経済分析システム（RESAS）

⑩県西部 6 市の創業の状況等

県西部 6 市の事業所の新設・廃業件数を見ると、高岡市は新設件数 351 件と最も多いが、廃業件数も 1,442 件と最も多く、新設件数を上回っている。

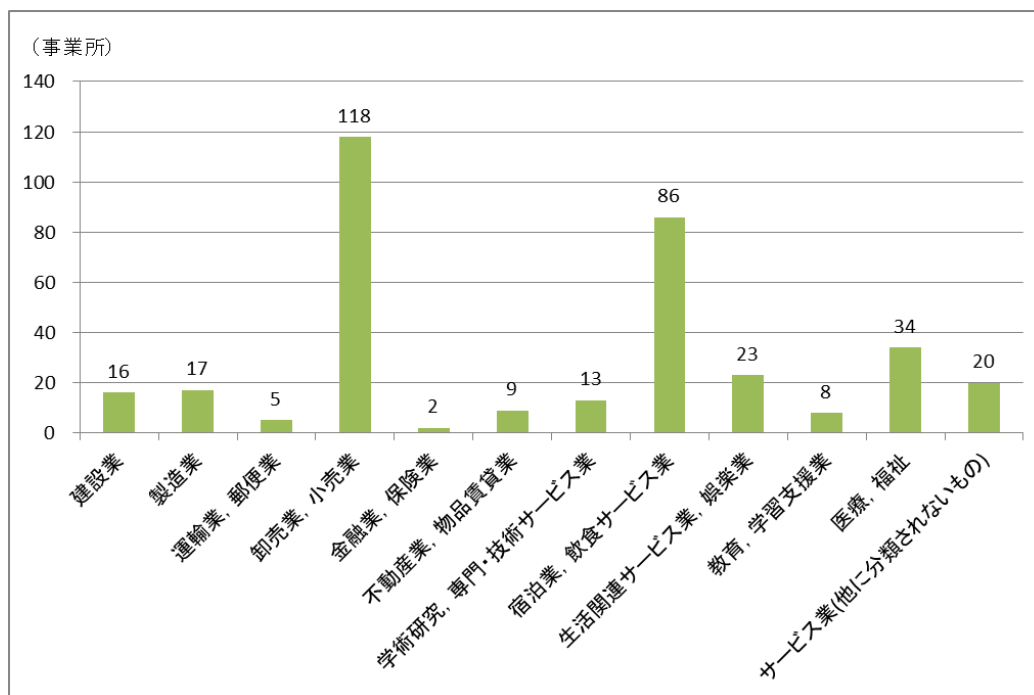
また、高岡市の新設事業所件数を産業大分類別で見ると、最も多いのは卸売業・小売業の 118 件であり、次いで宿泊業・飲食サービス業の 86 件であった。

ア. 県西部 6 市の事業所の新設・廃業件数（平成 21-24 年）



出典：総務省・経済産業省「平成 24 年経済センサスー活動調査」

イ. 高岡市の新設事業所件数（産業大分類別・平成 21-24 年）



出典：総務省・経済産業省「平成 24 年経済センサス活動調査」

※農林、漁業、鉱業、採石業、砂利採取業、電気・ガス・熱供給・水道業・情報通信業、複合サービス業は新設事業所は無かった。

⑪大規模小売店舗の状況

平成 28 年 4 月 1 日時点で大規模小売店舗として富山県に届出があった店舗数は高岡市内で 48 となっており、このうち 8 店舗は前計画策定後に開店している。これらの大規模小売店舗の売場面積合計は 210,382 m²で、平成 26 年の商業統計調査における高岡市内の小売業の売場面積（294,520 m²）に対して 71%の水準となっており、大規模小売店舗の存在が高岡市商業全体に大きなウェイトを占めていることがわかる。

このうち、中心市街地内で営業している大規模小売店舗は御旅屋セリオのみとなっている。かつては複数の大規模小売店舗が中心市街地で営業しており、中心市街地の吸引力の低下が懸念されるところであるが、平成 23 年 11 月に、高岡サティ跡地にホームセンターおよび食品スーパーが開店したほか、平成 26 年 3 月に、賑わいの創出やコミュニティ機能の再生を目指した新しいステーションビル「クルン高岡」がオープンするなど、中心市街地における商業機能および吸引力の向上が期待されている。

高岡市における大規模小売店舗の状況

店舗名	開店日	売場面積(㎡)	店舗名	開店日	売場面積(㎡)
1 イオンモール高岡	H14.9.19	54,200	11 ひらせいスーパーセンター高岡内島店	H19.6.13	4,051
2 御旅屋セリオ	H6.3.1	19,877	12 バロー高岡木津店	H17.4.28	3,982
3 イオン高岡ショッピングセンター	S58.7.27	11,996	13 アルビス米島店	H19.6.1	3,900
4 ホームセンタームサシ高岡店	H22.10.12	6,873	14 高岡蓮花寺モール	H26.11.21	3,766
5 グリーンモール中曽根	H20.11.20	6,325	15 ヤマダ電機テックランド高岡店	H12.8.11	3,600
6 DCMカーマ高岡野村店	H6.4.29	5,489	16 カーマホームセンター高岡六家店	H6.12.1	3,518
7 ケーズデンキ高岡店	H25.7.4	5,401	17 アルペン高岡店	H10.9.10	3,281
8 ニトリ高岡店	H19.4.20	5,271	18 福岡ショッピングプラザタビス	H2.12.8	3,236
9 神島リビング	S52.5.1	5,066	19 ジャック高岡鐘紡店 キタムラ鐘紡店 ハードオフ高岡鐘紡店	H23.7.24	3,129
10 バローショッピングセンター高岡万葉店	H11.11.18	4,738	売場面積3,000未満 29施設		52,683
合計 48施設					210,382

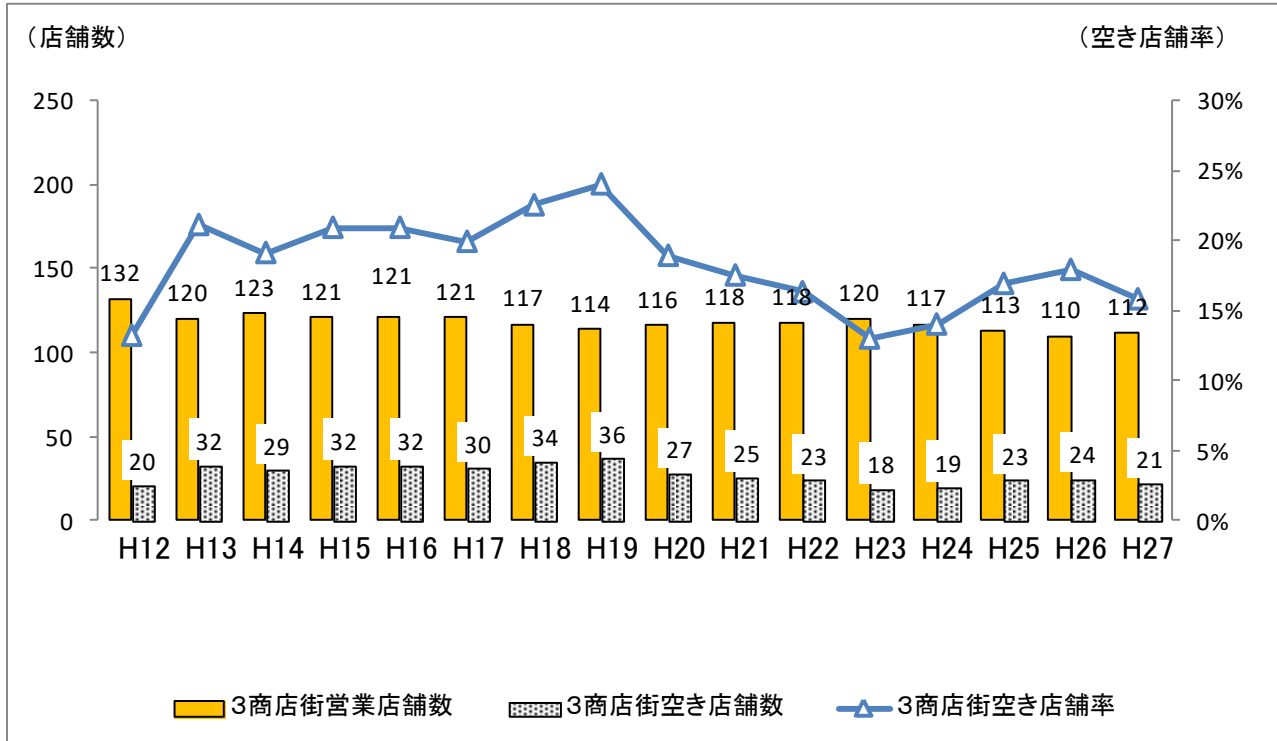
出典：富山県商業まちづくり課 大規模小売店舗の概要（平成 28 年 4 月 1 日現在）

⑫中心商店街（3 商店街）の空き店舗率・空き店舗数

中心商店街（3 商店街）における空き店舗率・空き店舗数は長期間にわたって増加傾向にあったが、平成 19 年 11 月の前々計画実施後は空き店舗数、空き店舗率とも改善をみた。

これは、空き店舗の減少は開業支援事業の実施による営業店舗化促進によるところが大きいが、一方では、店舗の完全廃業に伴う一般住宅化による側面もある。

中心商店街（3 商店街）における空き店舗の状況



出典：高岡市商業雇用課・末広開発(株)「空き店舗調査」

（注）末広町商店街、末広坂商店街、御旅屋通り商店街の合計

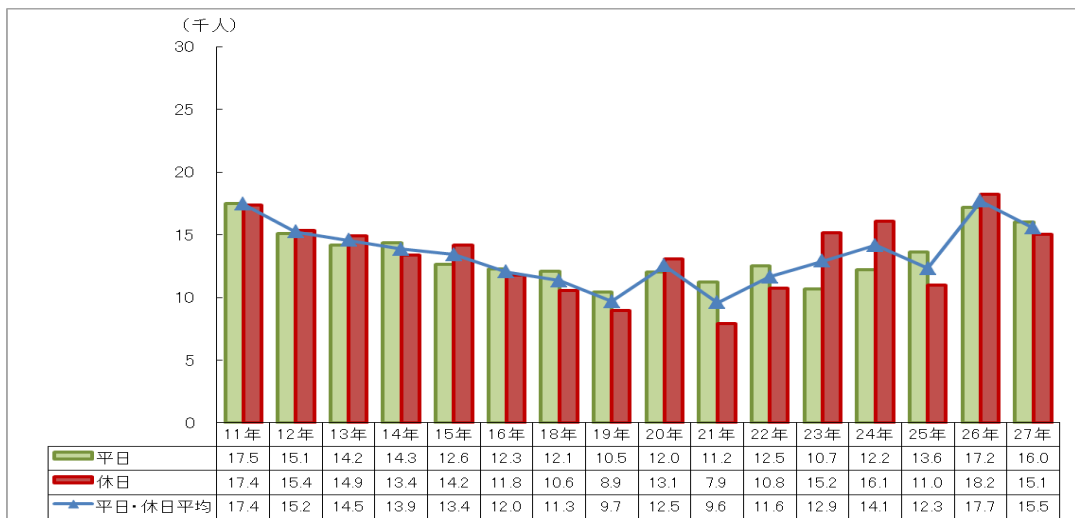
⑬歩行者・自転車通行量の状況

中心市街地のメインに位置する中心商店街（6地点）における歩行者・自転車通行量は平日・休日ともに長期にわたって減少を続けてきたが、近年、高岡駅周辺において施設整備が進められ、平成16年4月にウイング・ウイング高岡がオープンとなったほか、平成23年8月の高岡駅南北自由通路[通称：万葉ロード]の使用開始、平成26年3月の「クルン高岡」のオープンなど公共交通の結節機能の強化や南北市街地の一体化等を目的とした施設整備が進められたこと、更には平成23年11月に高岡サティ跡地にホームセンターおよび食品スーパーが開店するなど新たな商業集積としての機能も加わり、空き店舗対策の支援強化の取り組みや、観光・文化的な魅力向上など高岡市の地域特性を活かした新たな誘引強化の取り組みを通じ、近年は歩行者・自転車通行量は増加傾向に転じている。

【歩行者・自転車
通行量6調査地点】



中心商店街（6地点）における歩行者・自転車通行量の推移



出典：高岡市商業雇用課「歩行者・自転車通行量調査」

(注) 調査地点：①駅前地下街自由通路（平成24・25年は万葉ロード北側、平成26年以降は高岡駅北口歩行者専用道（人工デッキ））②末広町（東側）、③末広町（西側）、④高の宮通り、⑤末広坂（両側）、⑥御旅屋通り 平成17年は調査が未実施

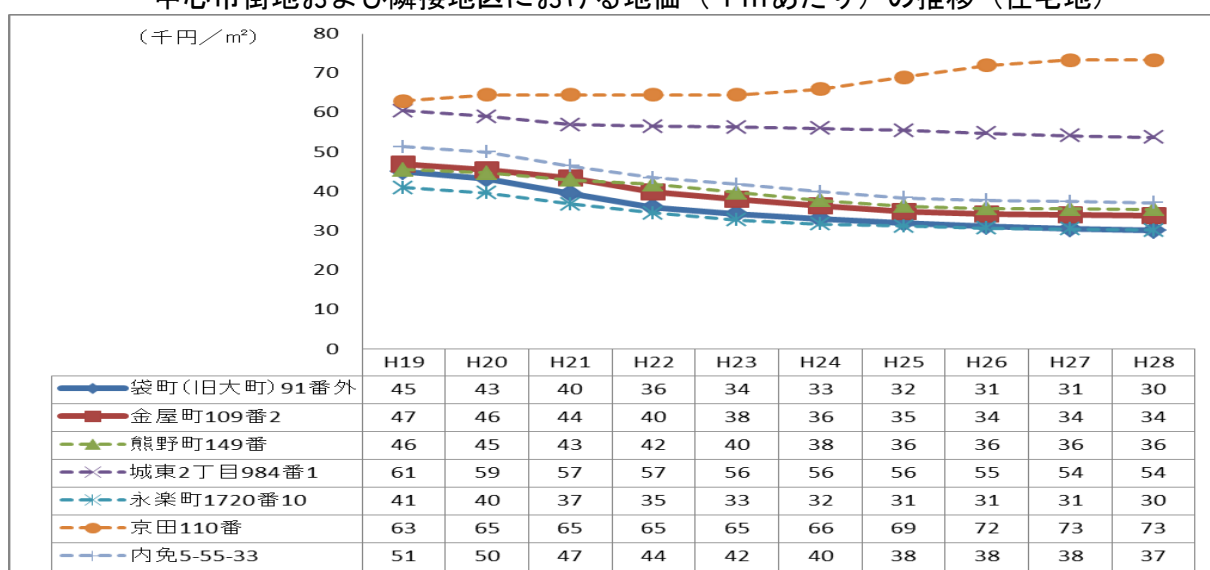
⑭地価の状況

中心市街地内住宅地の地価は長期的に下落傾向にあり、下落率の傾向は近年北陸新幹線の新高岡駅等の整備が進んだ駅南部を除いた全市的な傾向に近く、地価も隣接する地域と比較して相対的に低くなっている。

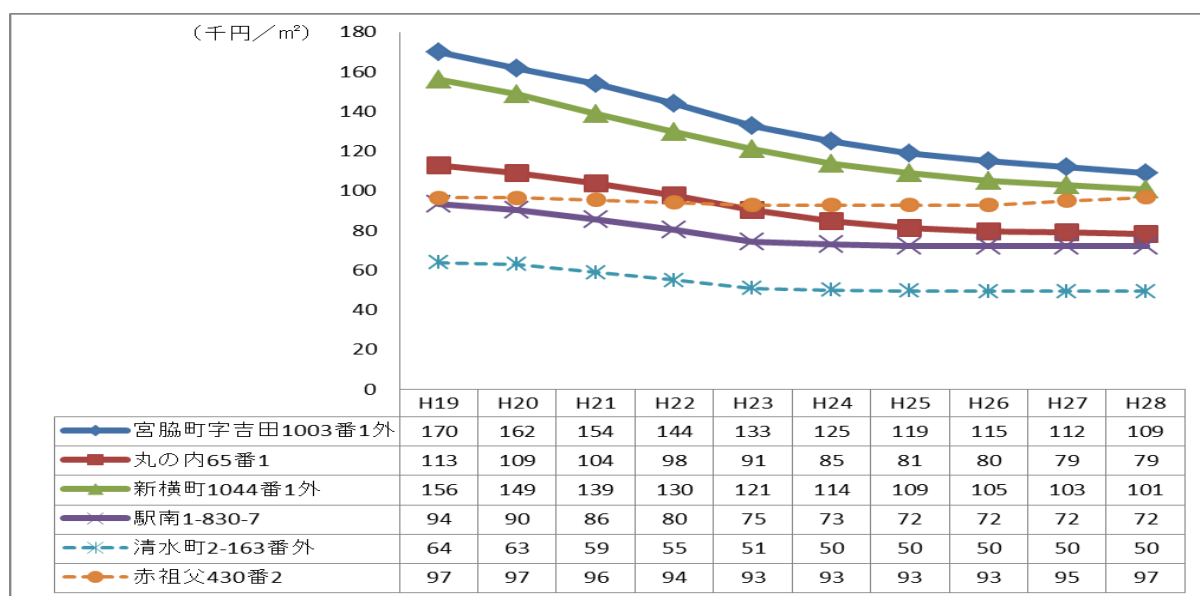
しかしながら、駅北部の中心市街地には狭隘な区画が多く、まとまった広さの土地を確保できないことに加え、老朽化した建物が多く、それらの除却費がかかることなどにより、開発が進まない状況にある。

他方、中心市街地内商業地の地価は、周辺地区と比較して下落幅が大きいものの、水準自体は依然として高く、中心市街地への新たな店舗や事業所の進出が進まない要因の一つになっていると考えられる。

中心市街地および隣接地区における地価（1㎡あたり）の推移（住宅地）



中心市街地および隣接地区における地価（1㎡あたり）の推移（商業地）



出典：国土交通省地価公示

（注）破線は中心市街地に隣接する地区の公示価格

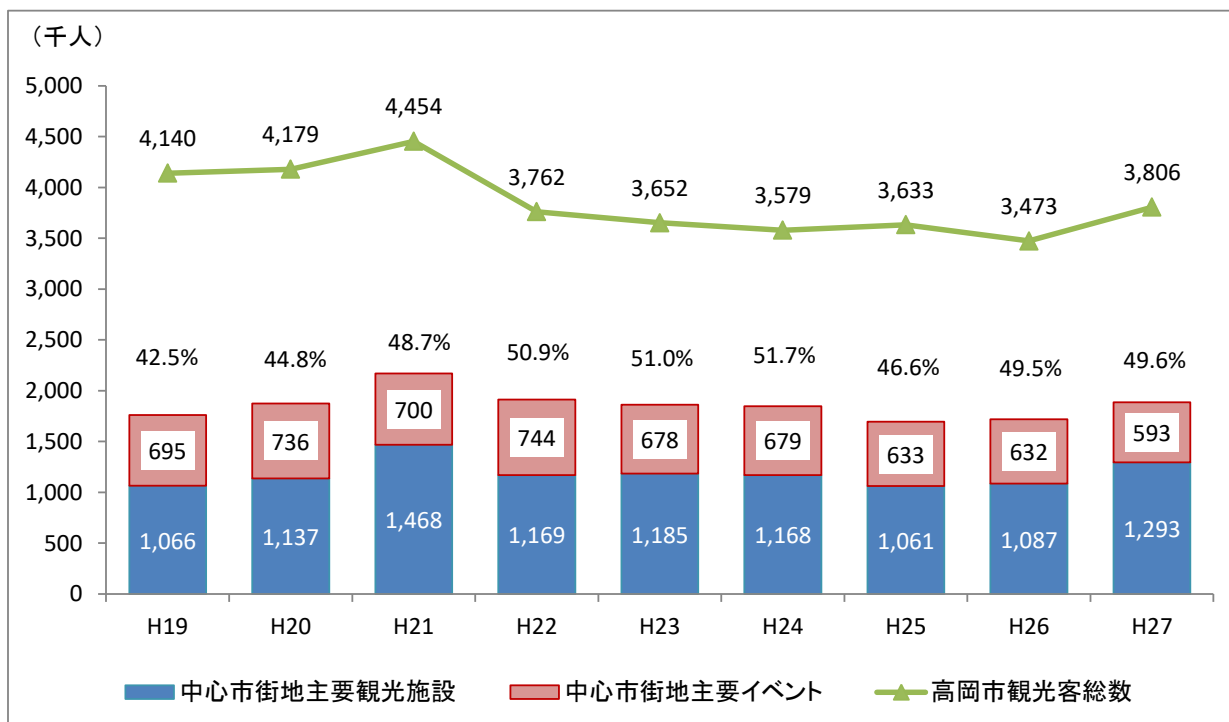
⑮観光客の状況

中心市街地には、高岡市を代表する歴史・文化資産が集積しており、本市への観光客の約半数は中心市街地に立ち寄る。

平成 19 年以降は、中心市街地においても交流人口拡大に向けた各種取り組みの実施、平成 21 年の開町 400 年事業の実施に力を入れ、さらに東海北陸自動車道の全線開通もあって、全市および中心市街地において観光客入込数が増加基調となった。

平成 22 年以降は開町 400 年事業の反動減および東海北陸自動車道全線開通の効果が薄れてきたこと、また、東日本大震災の余波や貸し切りバスの値上げに伴う団体旅行の落ち込みなどにより、全市および中心市街地において観光客入込数が減少基調となったが、平成 27 年は北陸新幹線の開業効果もあって増加に転じている。

観光客入込数の推移と中心市街地のシェア

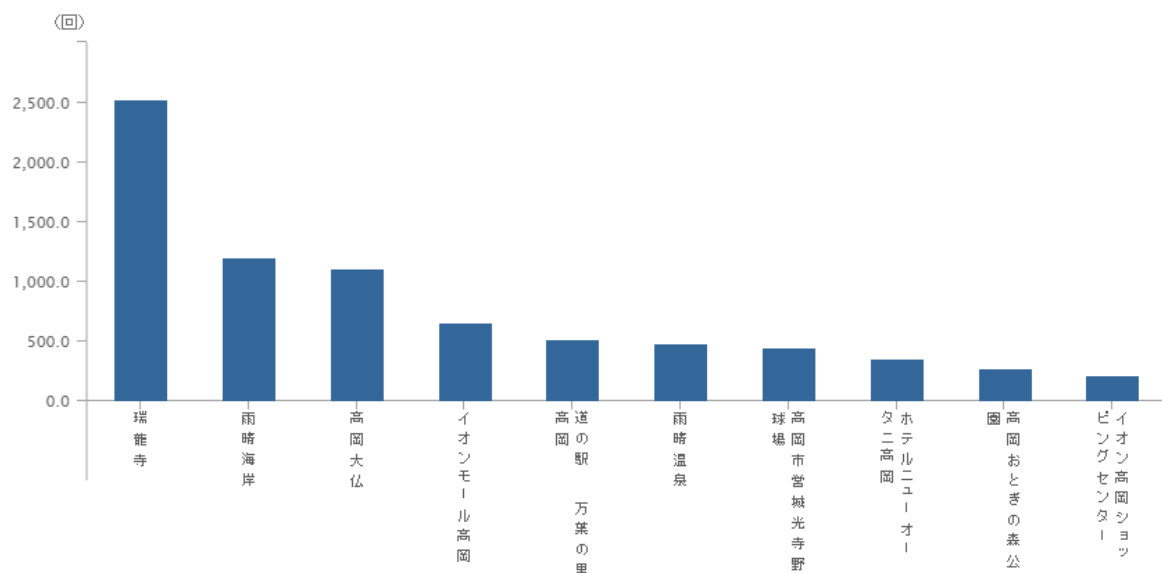


出典：高岡市観光交流課

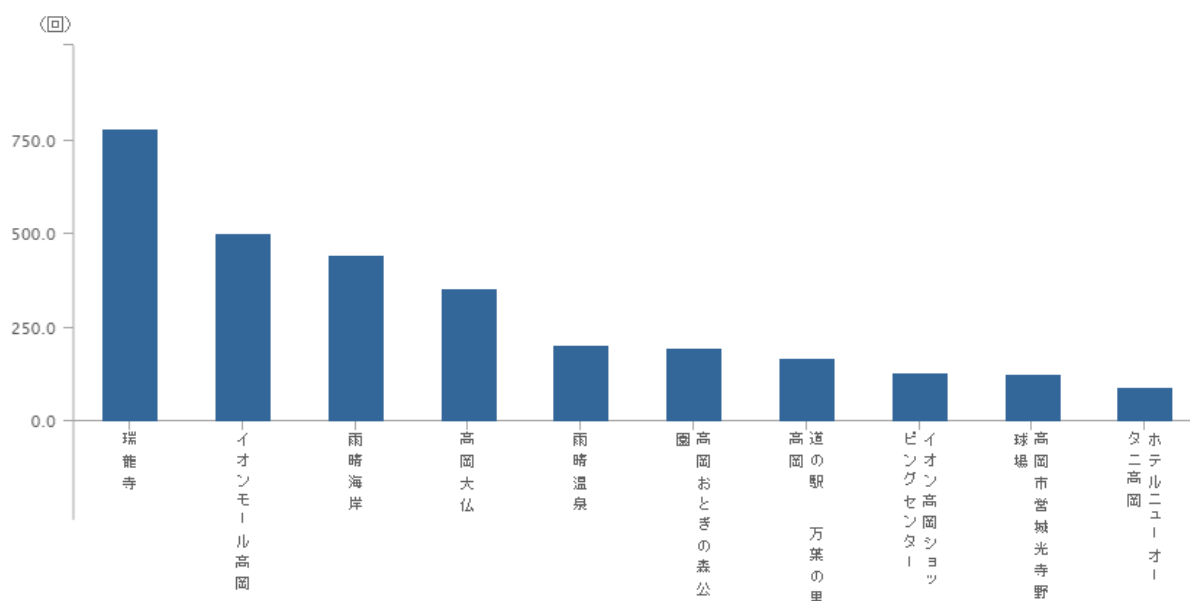
- (注 1) ・ 中心市街地主要観光施設は、古城公園、瑞龍寺、高岡大仏、山町筋（菅野家住宅、土蔵造りのまち資料館、高岡御車山会館）、金屋町（鋳物資料館）を合計したもの
 ・ 中心市街地主要イベントは、高岡御車山祭・高岡七夕まつり・高岡万葉まつり・日本海高岡なべ祭り・高岡桜まつり・八丁道おもしろ市・金屋町楽市を合計したもの
- (注 2) ・ 瑞龍寺ライトアップは瑞龍寺の観光客入込数とし計測
 ・ 平成21年の古城公園は開町400年記念事業による入込客数を含む

なお、地域経済分析システム（RESAS）を用いて平成 27 年の高岡市内の目的地検索ランキング（自動車利用）を見ると、中心市街地にある施設では、「瑞龍寺」（平日：上位 1 位、休日：上位 1 位）、「高岡大仏」（平日：上位 3 位、休日：4 位）、「ホテルニューオータニ高岡」（平日：8 位、休日：10 位）となっている。

高岡市の目的地一覧（平成 27 年：平日、自動車利用）



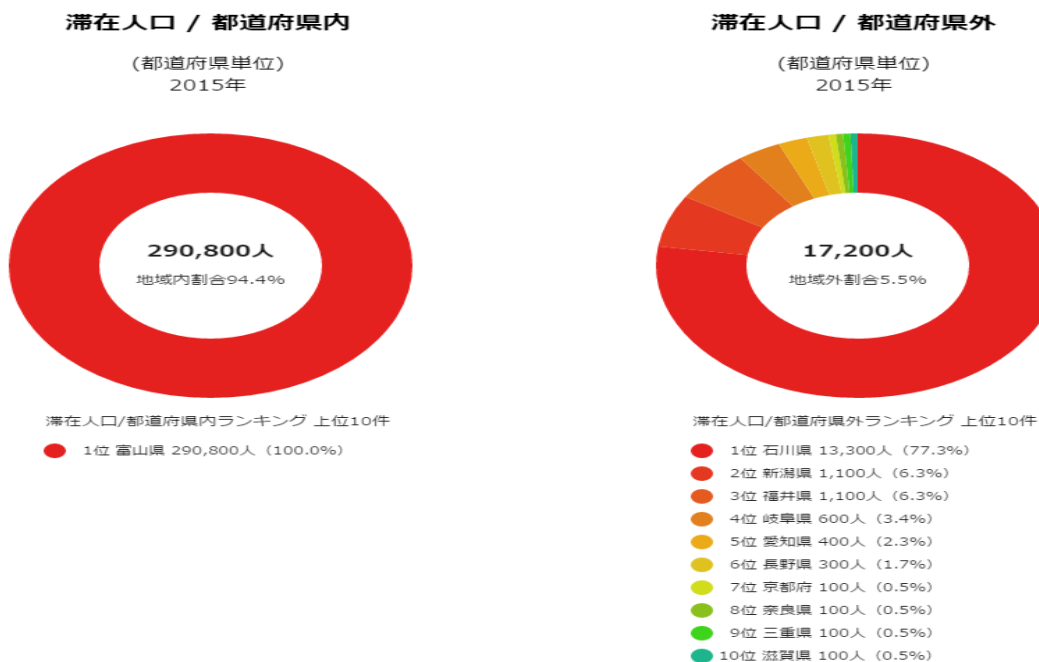
高岡市の目的地一覧（平成 27 年：休日、自動車利用）



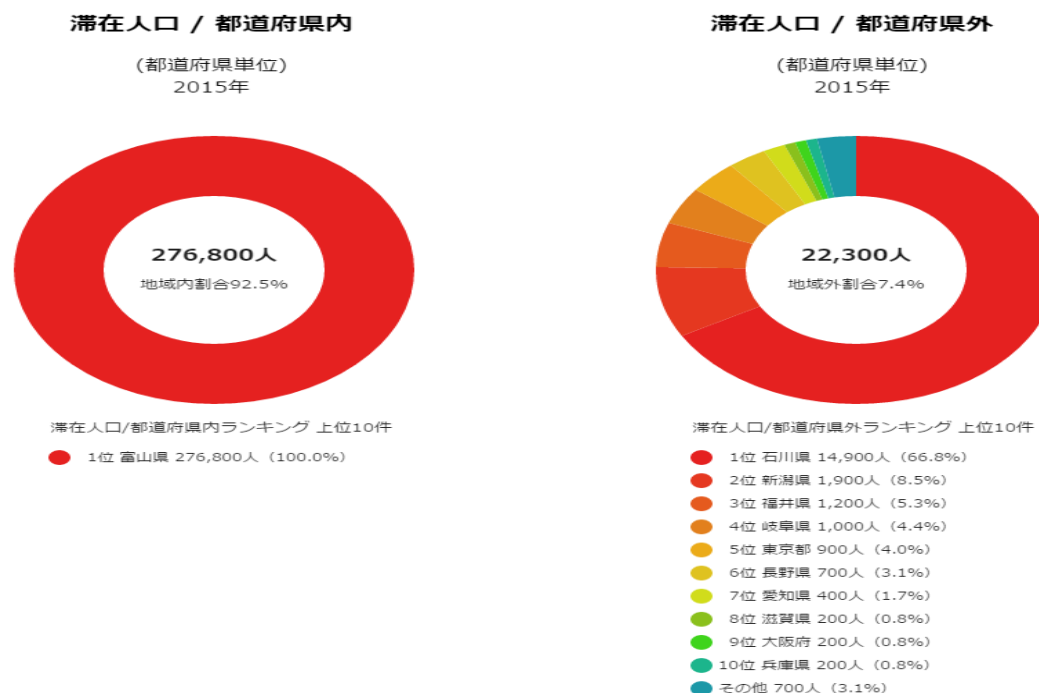
出典：株式会社ナビタイムジャパン「経路検索条件データ」地域経済分析システム（RESAS）

また、平成 27 年の高岡市への来訪者の状況を見ると、平日・休日ともに 9 割超が富山県内からであるが、県外からの来訪者の内訳では石川県、新潟県、福井県及び岐阜県といった近県からの来訪者が多く、特に石川県からの来訪者は平日で約 8 割、休日で約 7 割となっている。

国内から高岡市に来訪した人の内訳（平成 27 年：平日）



国内から高岡市に来訪した人の内訳（平成 27 年：休日）

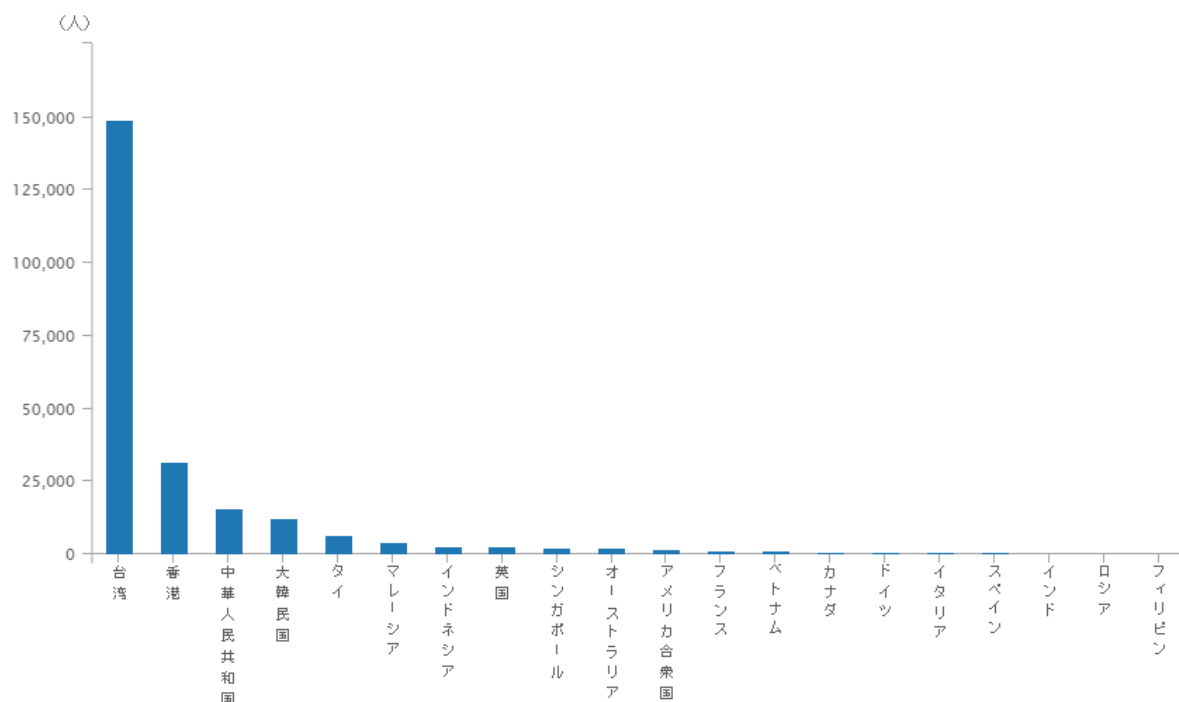


出典：株式会社 A goop「流動人口データ」地域経済分析システム (RESAS)

平成 27 年の観光・レジャー目的に富山県へ来訪した外国人の内訳を見ると、台湾、香港、中華人民共和国、大韓民国といった東アジアからの来訪者が多い。特に台湾からの来訪者が多く、全体（231,466 人）の 6 割超（149,013 人）となっている。

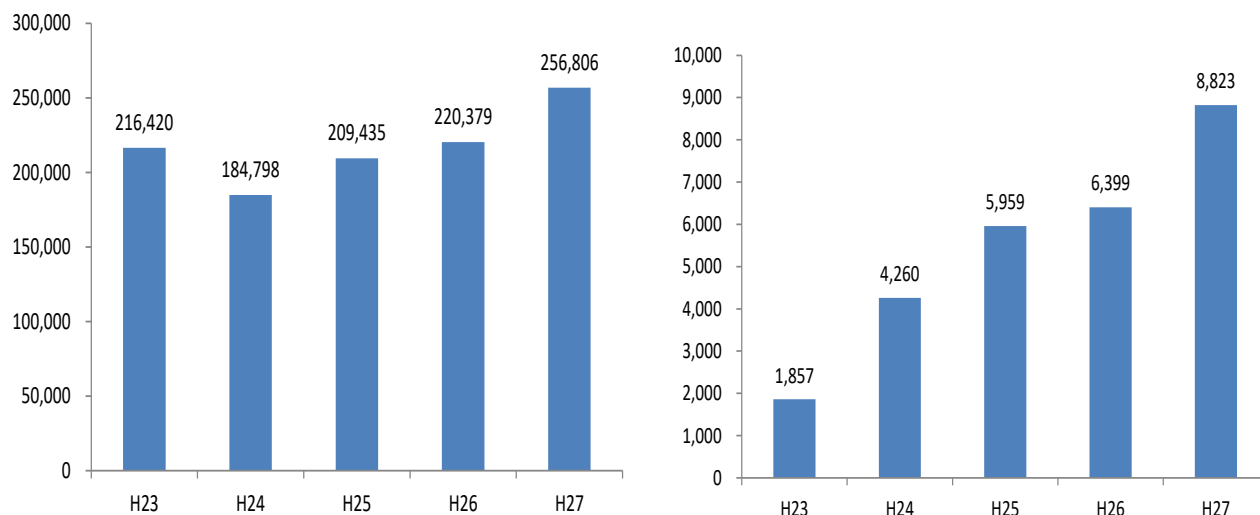
高岡市における延べ宿泊者数を見ると、平成 24 年以降は増加傾向となっている。特に外国人の増加が顕著であり、平成 27 年は 8,823 人と平成 24 年の 2 倍を超える水準となっている。

外国から富山県に来訪した人の内訳（平成 27 年）



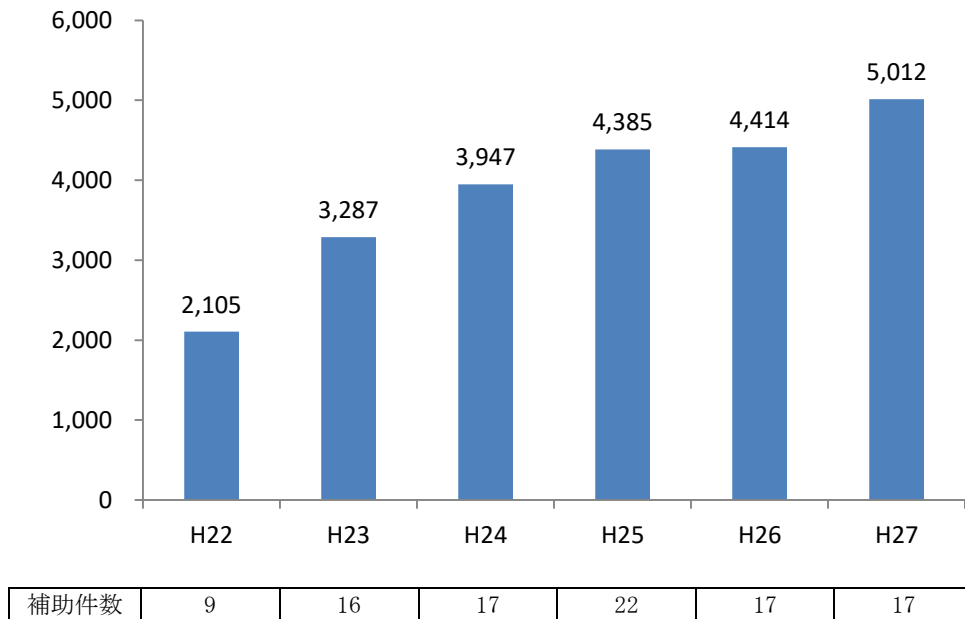
出典：観光庁「訪日外国人消費動向調査」、日本政府観光局「訪日外客数」地域経済分析システム（RESAS）

高岡市内延べ宿泊者数（左：全体、右：うち外国人）



出典：観光庁「宿泊旅行統計調査」

高岡市内コンベンション開催補助（宿泊者数、件数）の推移



出典：高岡市観光交流課

⑩高岡駅周辺における公共交通利用者の状況

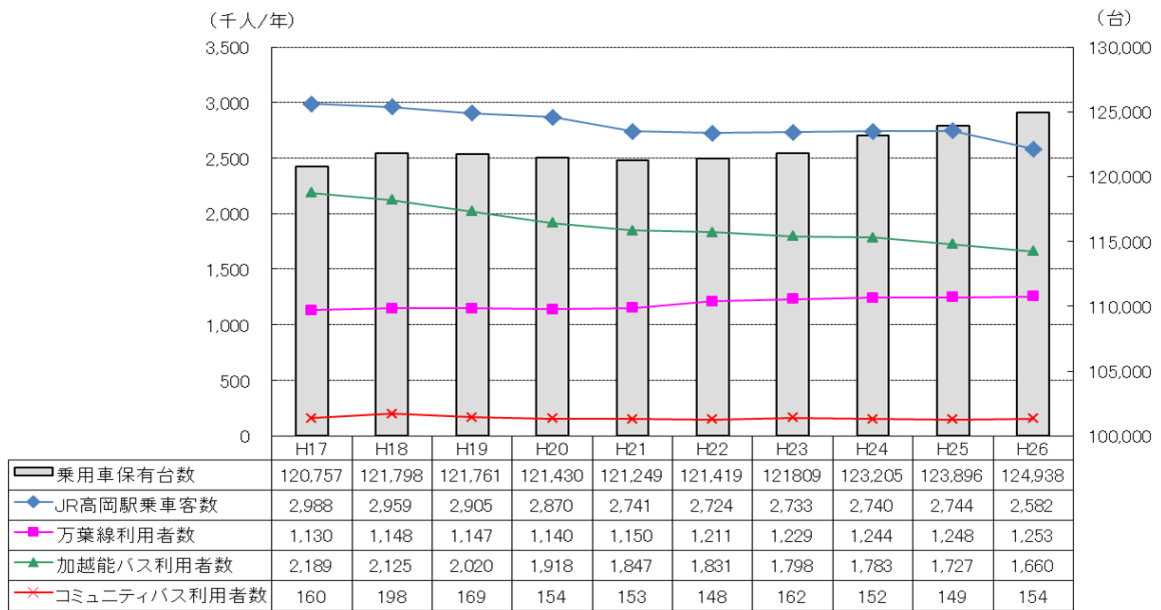
高岡駅は鉄道、路面電車、路線バス、コミュニティバス等の多様な公共交通が集まる交通結節点である。

近年、全市の人口が減少し、人的流動について、その発生絶対量が減少に向かっていると推察される中、乗用車保有台数は増加傾向にある。こうした状況下で、公共交通機関の利用者数も万葉線を除いて全体として漸減傾向にあり、市街地の日常的な移動手段として平成 13 年度より運行が始まったコミュニティバスについても利用者が横ばい傾向となっている。

しかし、1 日当りの利用者数をみると、平成 26 年は高岡駅では 7,100 人/日が乗車利用しており、加越能バスおよび万葉線の高岡駅での乗車利用はそれぞれ 2,000 人/日、1,100 人/日と推定され、コミュニティバスを含めると、現在でも約 10,500 人が移動する際の拠点として高岡駅周辺が機能している。

高岡駅周辺では、平成 23 年 8 月に供用開始となった南北自由通路や橋上駅舎、および平成 26 年 3 月に供用開始となった駅北口交通広場、新しい高岡ステーションビル（クルン高岡）により、交通・交流のための結節点としての機能が強化された。今後、隣接する高岡駅前東地区での開発が進められるなど、高岡駅周辺が賑わい創出の拠点として大きな役割を発揮することが期待されている。

公共交通機関の利用状況

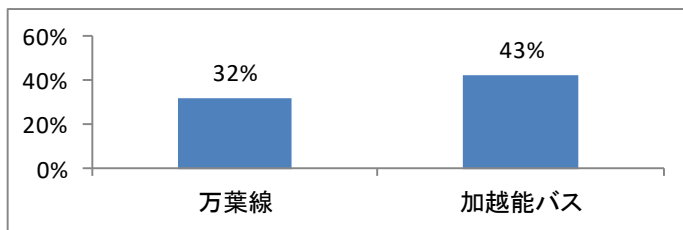


出典：高岡市統計書、富山県政要覧

(注1)・乗用車保有台数は、各年3/31現在の数値。平成18年3月までは旧高岡市と旧福岡町の合計。

(注2)・コミュニティバスは、平成18年度より2ルート運行。

乗車人員数に占める高岡駅前電停・バス停乗降者の割合



出典：

(万葉線) 平成21年6月調査

(加越能バス)

平成22年 高岡市自動車乗降調査

※上記割合は、万葉線及び加越能バスの高岡駅での乗車人員を算出するために使用

(4) 市民から見た中心市街地の現状

①中心市街地活性化に関する市民アンケート

i) 調査実施時期

平成 28 年 8 月 5 日～8 月 24 日

ii) 調査対象・方法

18 歳以上の市民 2,000 人を無作為に抽出し、郵送配布・回収により調査を実施。
696 人から回答を得た（回収率 34.8%）。

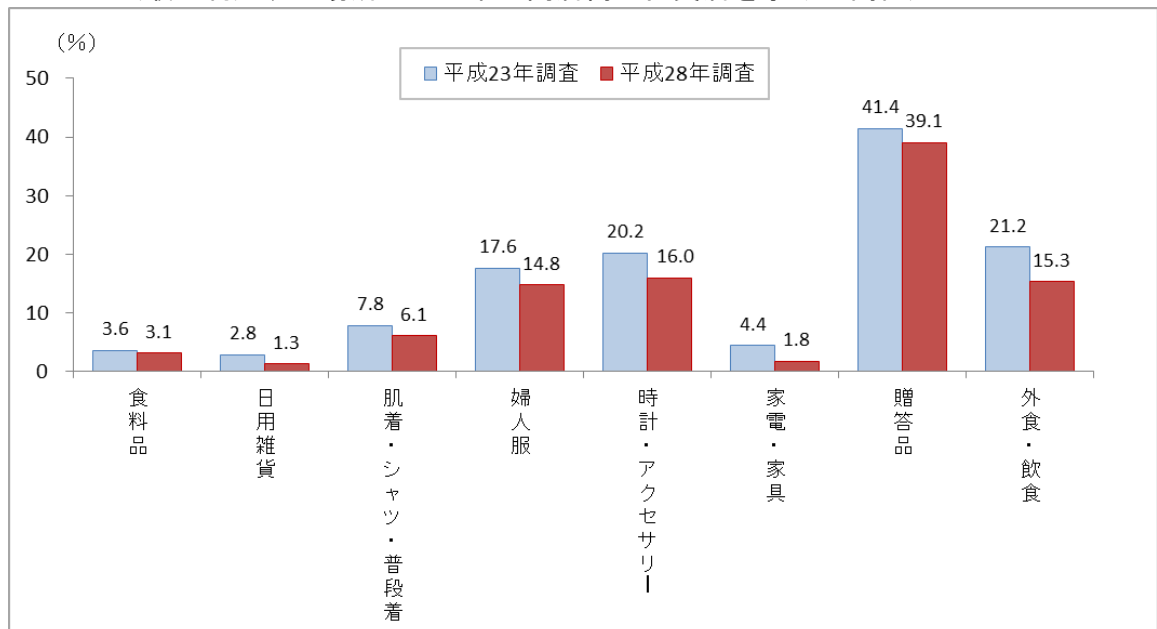
iii) 買物・飲食での中心市街地利用状況および中心商店街の商圈

買物・飲食等で中心市街地を最も多く利用する人の割合は、「贈答品」で 39.1%、「時計・アクセサリ」で 16.0%、「飲食」で 15.3%、「婦人服」で 14.8%となっている。これに対し、最寄品目で中心市街地を最も利用するという回答は極めて少ない。

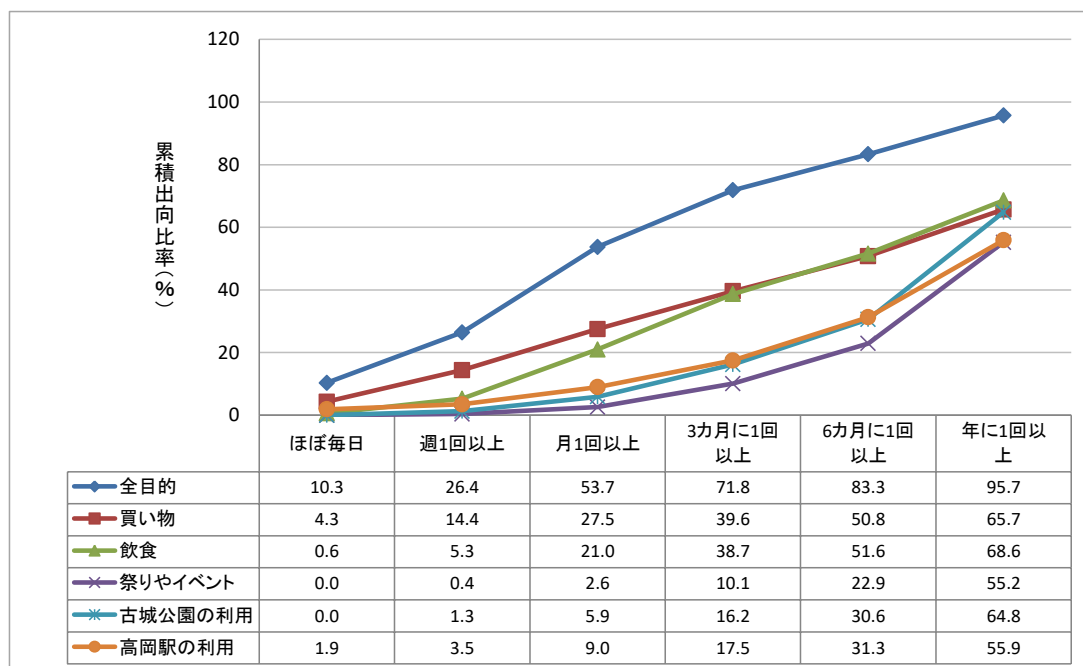
平成 23 年に実施したアンケート結果と比較すると、購買にかかる部分については全般的に若干の低下がみられるものの、「買物」を目的として週に 1 回以上中心市街地を訪れるとの回答が 14.4%あることと合わせ、市内全域を商圈（買回り品商圈＝週末商圈）とする商業集積は一定程度維持されている。

また、「教育・教養サービス」「レジャー、娯楽」分野で回答者の約 3 分の 1 が「中心市街地に行く場合が多い」としており、商業以外の教養、文化、娯楽の場としても中心市街地が一定の位置付けを得ていることがわかる。

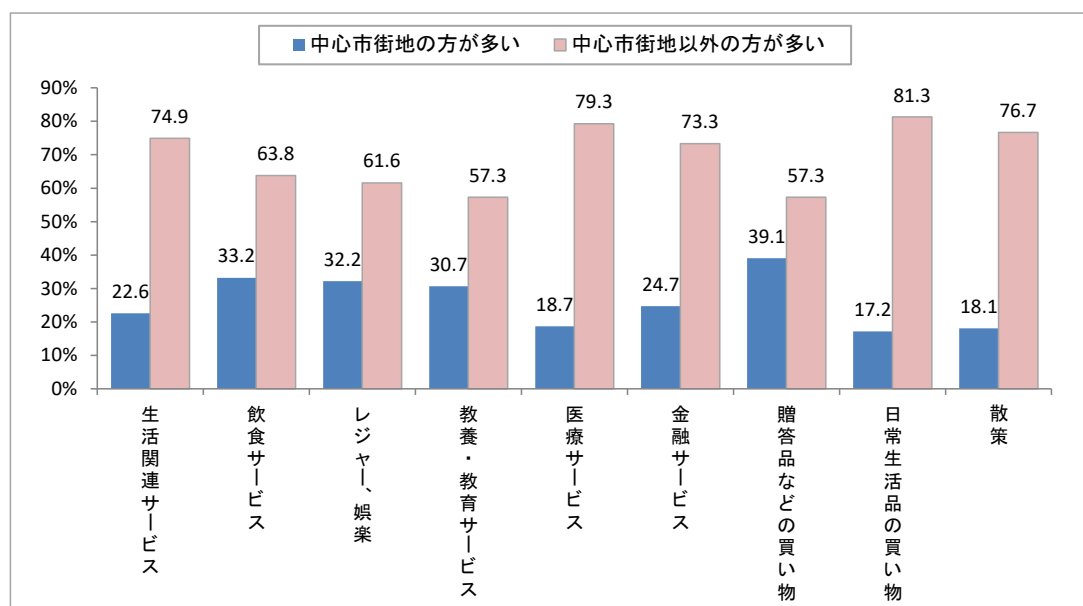
買物・飲食での中心市街地の利用状況
（最も利用する場所として中心商店街・百貨店を挙げた割合）



年に1回以上中心市街地に出かけるとの回答が多かった目的の頻度別累積出向比率



他の地域と比較した中心市街地（全域）の選択状況

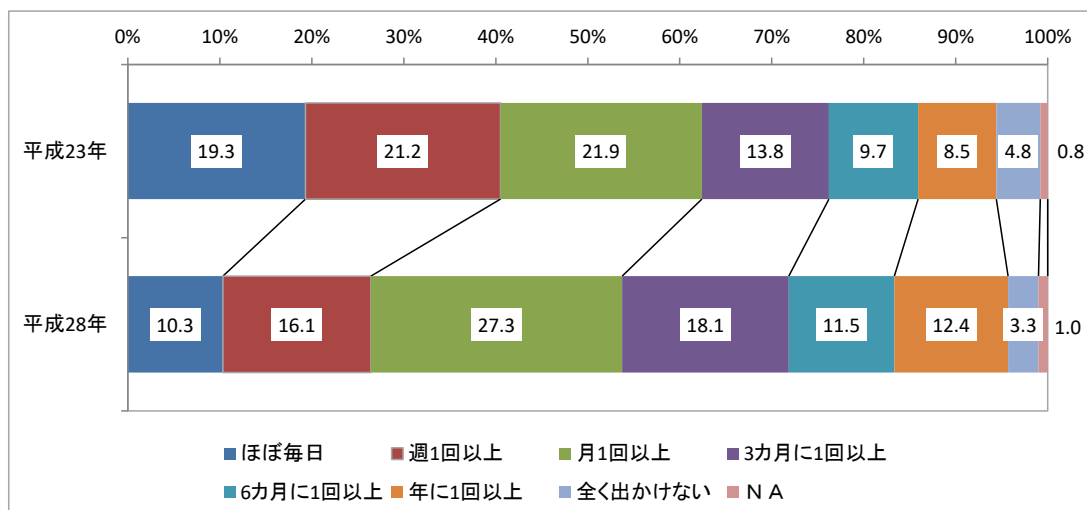


iv) 中心市街地への来街頻度

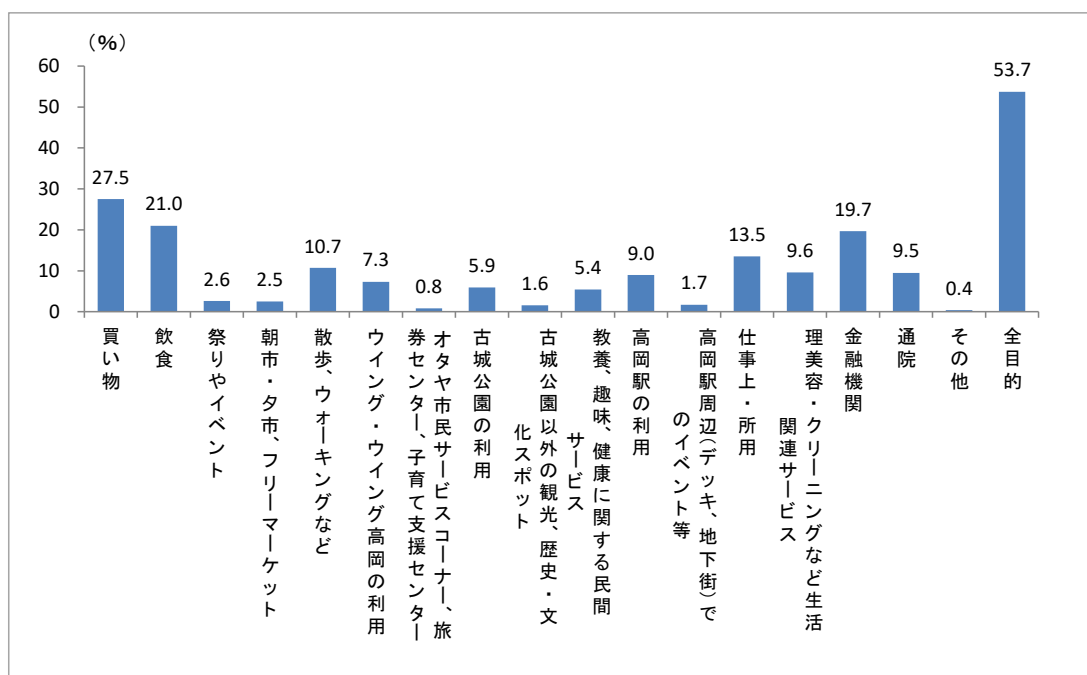
何らかの目的で中心市街地に出かける頻度は、「ほぼ毎日」で全回答者の約1割、「週に1回以上」で約3割、「月に1回以上」で約5割、「3カ月に1回以上」で約7割、「6カ月に1回以上」で約8割となり、「全く出かけない」人の割合は3.3%にとどまる。即ち、ほぼ全市民が何らかの目的で最低でも1年に1回は中心市街地を訪れていることになる。但し、平成23年に実施したアンケート結果と比較して、中心市街地への来街頻度はやや低下している。

目的別の来街頻度については、当該行動の実施頻度が異なることから一概には言えないが、「買い物」および「飲食」目的による来街頻度が高く、これらが中心市街地への主要な来街誘因となっている。

来街頻度（全目的）



1カ月に1回以上来街する人の割合（目的別）



v) 中心市街地に対する現状認識及び改善の評価

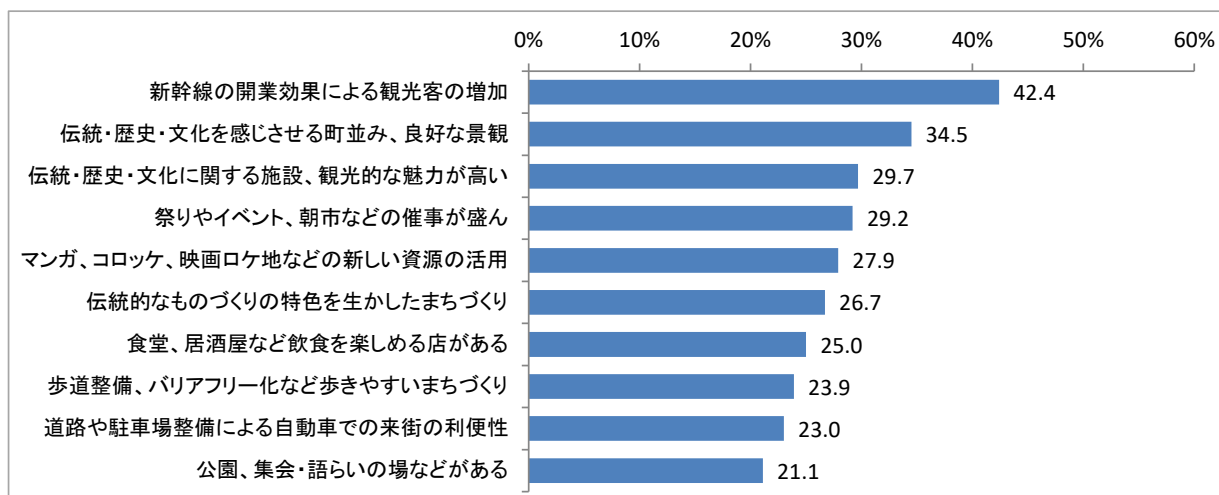
中心市街地の現状認識および改善状況について項目別に尋ねたところ、現状については全体では高く評価する人よりも低く評価する人の割合が高くなっているが、「新幹線の開業効果による観光客の増加」のほか、「歴史的な町並み、景観」「祭り・イベントの実施」「マンガやコロッセ等の新しい資源を活かしたまちづくり」において市民の評価が比較的高く、中心市街地の歴史・文化や高岡らしい特徴を活かしたまちづくり、誘客の取り組みが評価されている。

また、「歩行環境の整備」については、現状及び改善状況いずれも評価が高くなっており、また、「交通利便性」「観光スポットや店舗などの情報発信」といった都市機能については、現状の評価が十分に高まっているとは言えないまでも「改善している」との評価がなされている。このことから、中心市街地活性化に

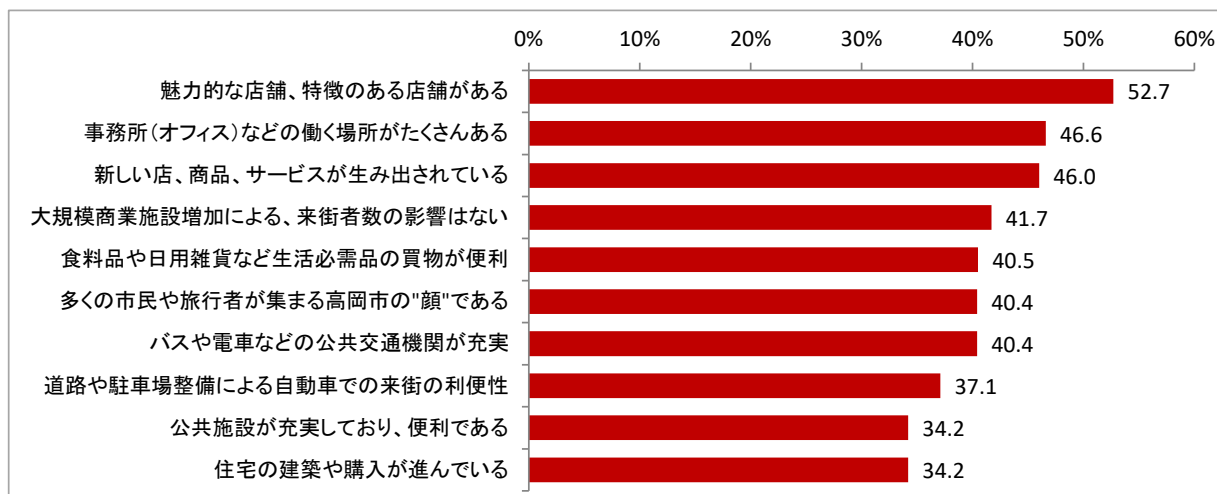
向けた各種環境整備の取り組みが、市民に浸透してきていることがうかがわれる。

他方、「業務機能」「店舗・新サービス」といった商業的、経済的な側面については総じて現状に対する評価が低いことに加え、「以前よりも悪化した」とする回答が多く、商業・産業面における中心市街地活性化の取り組み強化が求められていると言える。

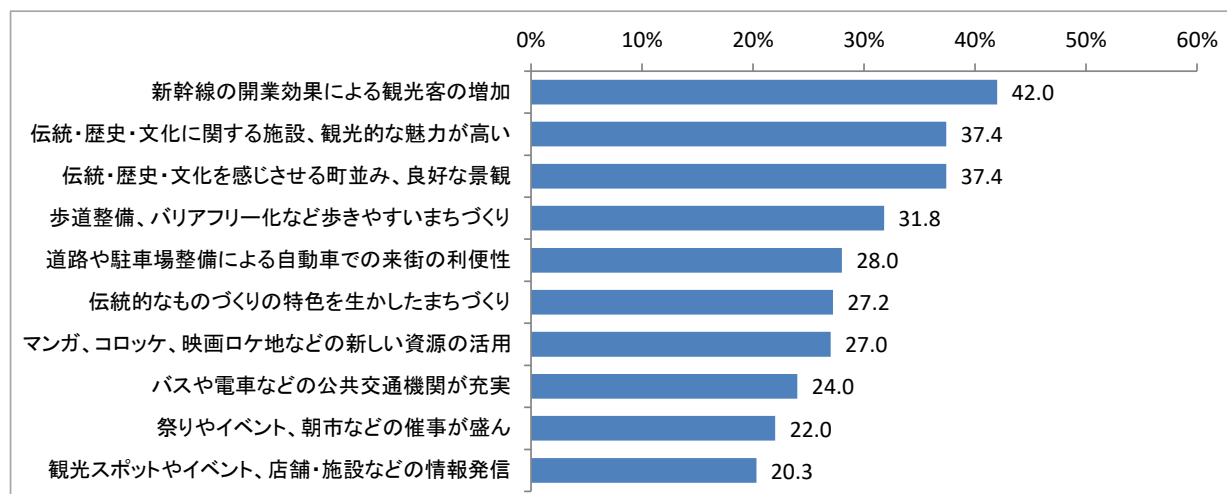
中心市街地の現状として比較的评价が「高い」項目



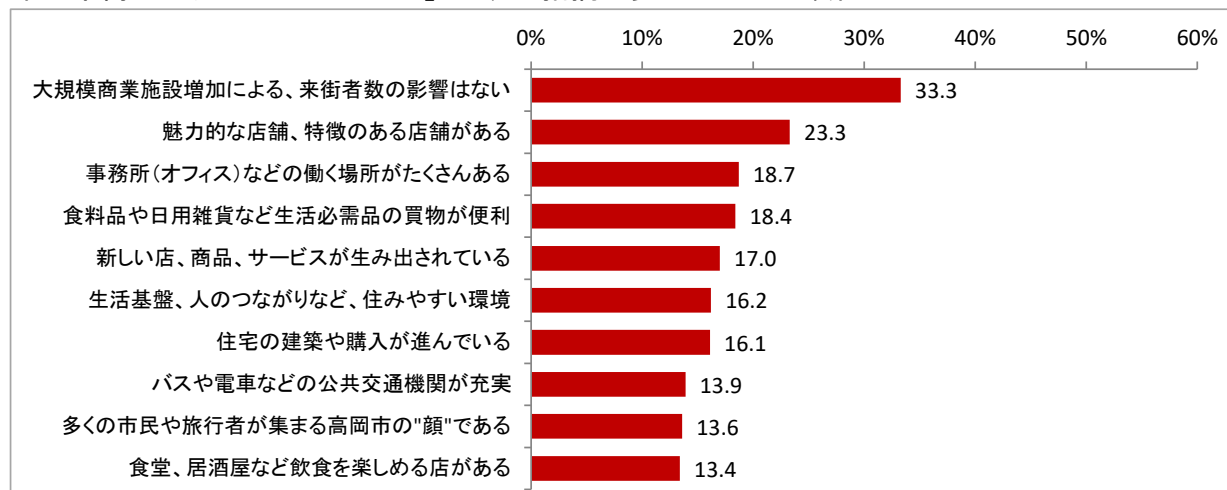
中心市街地の現状として評価が「低い」項目



中心市街地において「改善した」とする回答が多くみられた項目



中心市街地において「悪化した」とする指摘が多くみられた項目

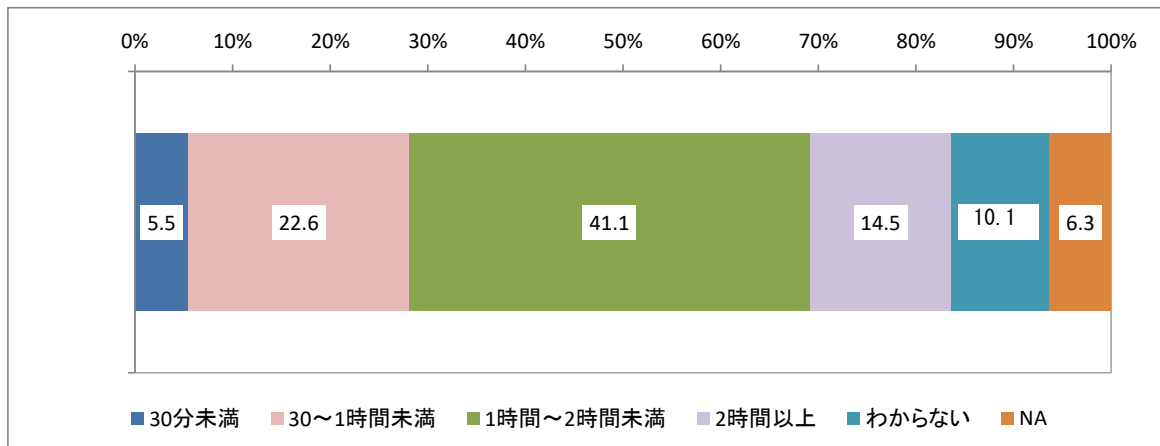


vi) 中心市街地への来街者の滞在時間

来街者の滞在時間については、回答者の 55.6%が「1 時間以上」としており、「1 時間未満」とした回答割合 (28.1%) を大きく上回っている。さらに、回答者の 14.5%は「2 時間以上」滞在する、としている。来街頻度がやや低下している中であって、来街者の多くは滞在時間が比較的長いと言える。

なお、1 カ月に 1 回以上来街する人の目的 (P26) を見ると商業、教養、文化、娯楽と幅が広く、中心市街地内における多様な機能空間が、長い滞在時間に繋がっていると推察される。

中心市街地への来街の滞在時間

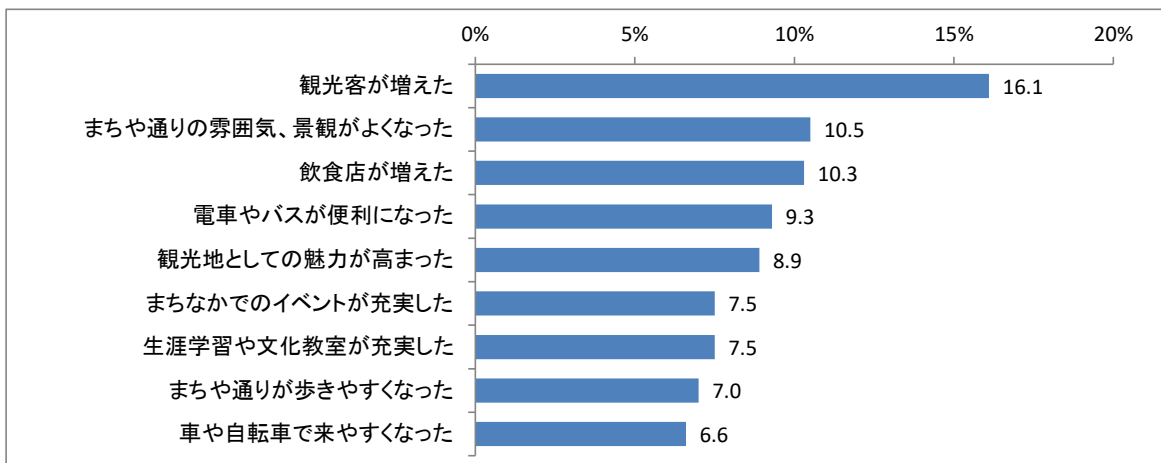


vii) 中心市街地活性化の取り組みに対する評価

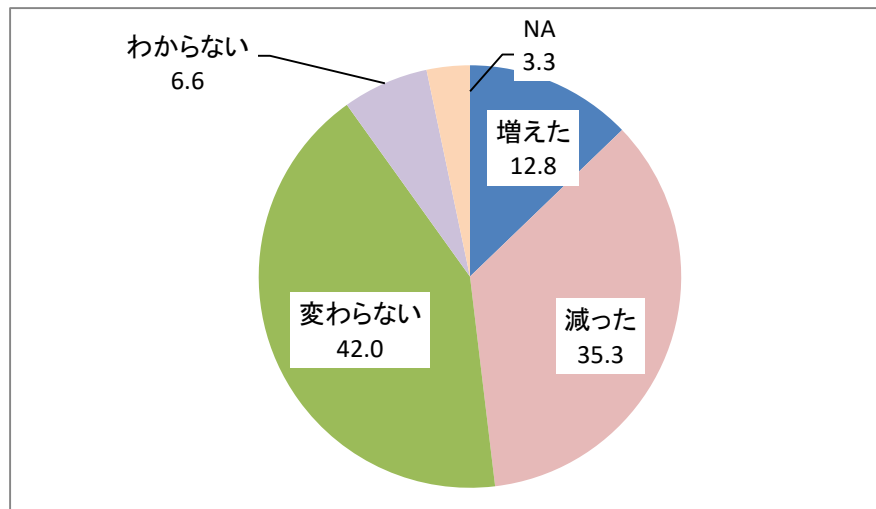
これまでの中心市街地活性化の取り組みに対し、「観光客数」「まちの雰囲気・景観」「飲食店」「交通利便性」「観光地としての魅力」について「良くなっている」との評価が比較的多くなっている。

また、来街頻度の変化については、全体では「減少」が「増加」を約 23 ポイント上回り 35.3%となっている。来街頻度が変化した主な「来街目的」をみると、「減少」では「買物」「飲食」、「増加」では「祭りやイベント」「古城公園」とした回答が多かった。

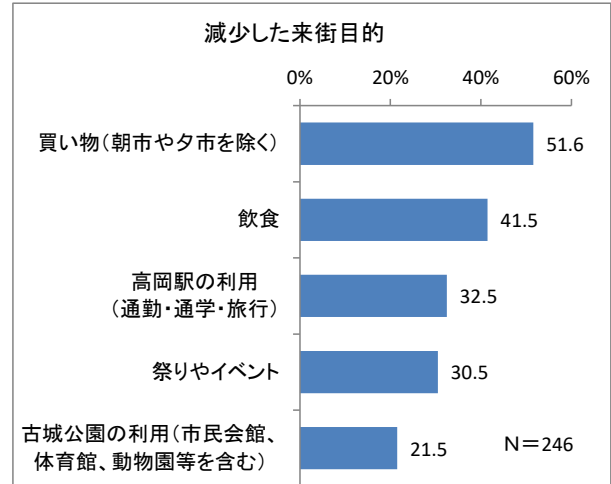
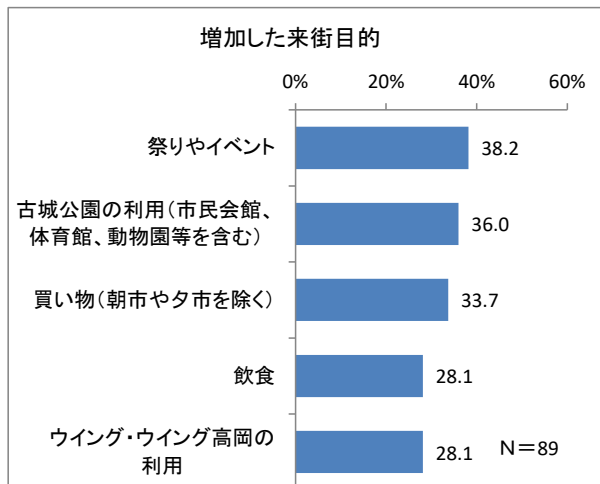
中心市街地で「良くなった点」



来街頻度の変化



頻度が変わった来街目的



②まちなか居住者アンケート調査

i) 調査実施時期：平成 28 年 8 月 5 日～8 月 24 日

ii) 調査対象・方法

中心市街地及びその周辺部（平米地区、定塚地区、下関地区、博労地区、川原地区、成美地区の各一部）の 20 歳以上の居住者 1,500 名を無作為に抽出し、郵送配布・回収により調査を実施。666 人から回答を得た（回収率 44.4%）。

iii) 中心市街地の居住環境に対する評価

地域の「住みよさ全般」については、84.9%が「住みよい・どちらかという住みよい」と回答し、平成 23 年に実施したまちなか居住者アンケート調査と同様の結果となった。

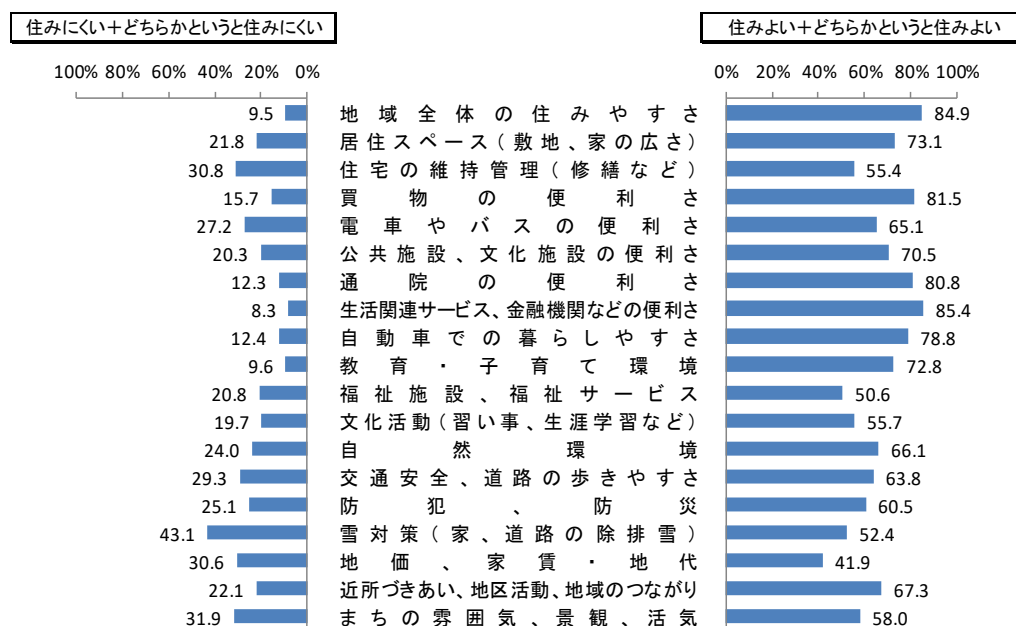
また、回答者全体の約 7 割が「今後もまちなかに居住したい」と回答し、市外を含めたまちなか以外への移転を希望する回答は約 1 割と極めて少なく、まちなかへの強い居住意向があることが確認された。

アンケートにおいて質問した項目のうち、「住みよい・どちらかと言えば住みよい」とする回答が半数を下回っているものは「地価、地代・家賃」(41.9%)のみとなっており、中心市街地居住の高コスト構造が障害要因として指摘されている。

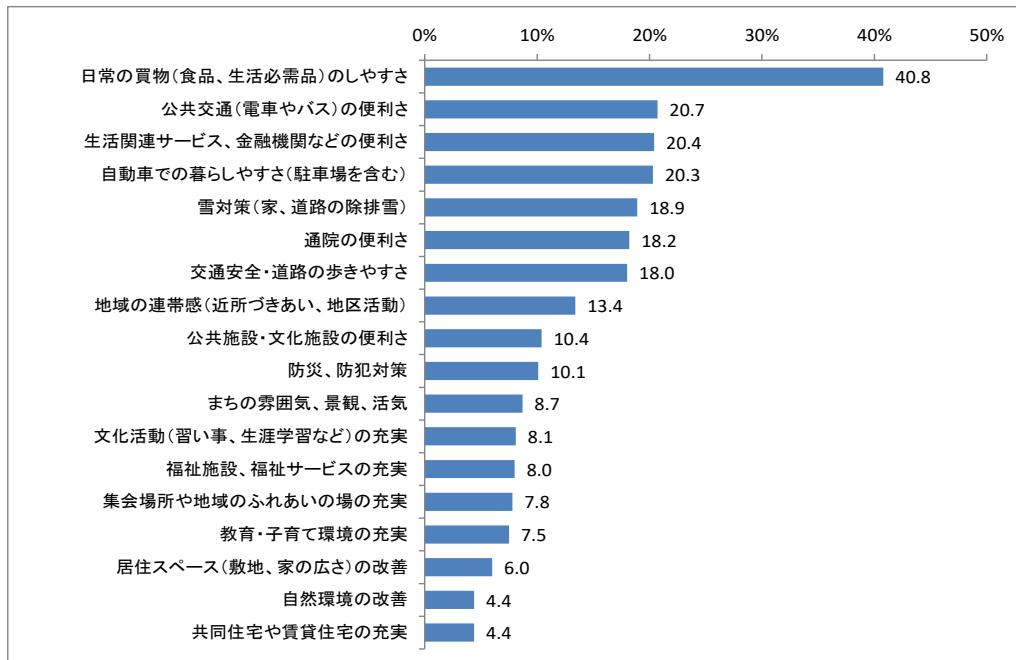
また、「公共交通（電車やバス）の便利さ」「自動車での暮らしやすさ（駐車場を含む）」「交通安全、道路の歩きやすさ」といった項目は、2割程度の回答者が「改善した事項」として当該項目を選択していることから、市街地の整備・改善にかかる事業の実施や交通利便性の向上に向けた各種取り組みの成果が居住者に浸透したと考えることができる。

さらには、居住環境で改善した事項として「買物」が最も多く選択されており、平成 23 年 11 月に、高岡サティ跡地にホームセンターおよび食品スーパーが開店したほか、平成 26 年 3 月に、賑わいの創出やコミュニティ機能の再生を目指した新しいステーションビル「クルン高岡」がオープンしたことや、定期的で開催している朝市・夕市等の日常生活品の購入機会の提供が、中心市街地居住者の日常生活を支える手段として評価されているものと解することができる。

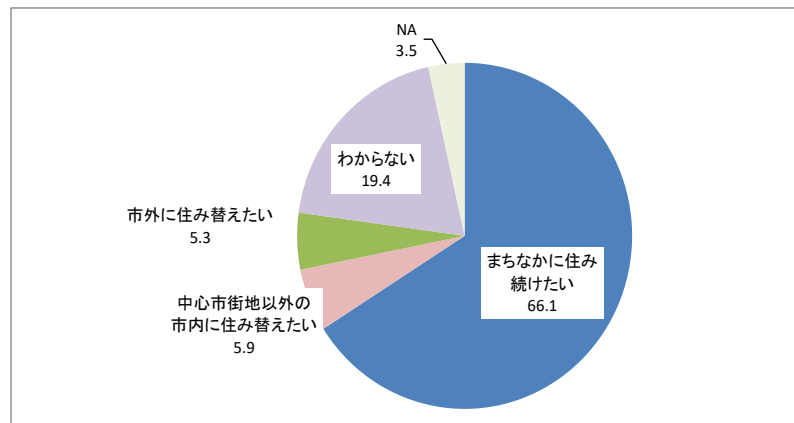
中心市街地の住みよさ



まちなかの居住環境について「良くなったもの」



まちなかへの居住意向

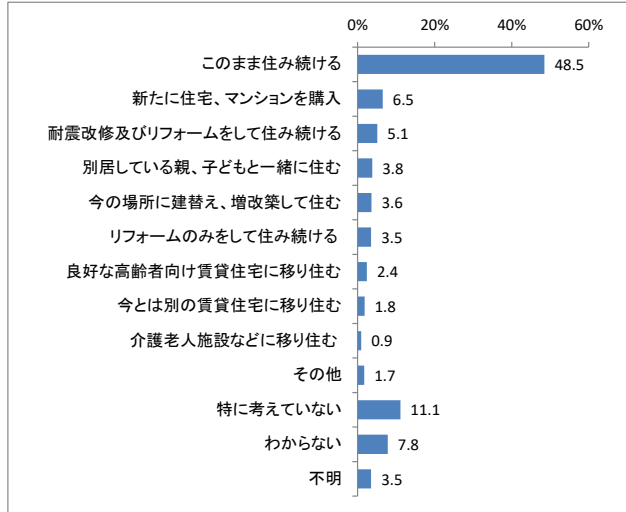


iv) 今後予想されるニーズへの対応

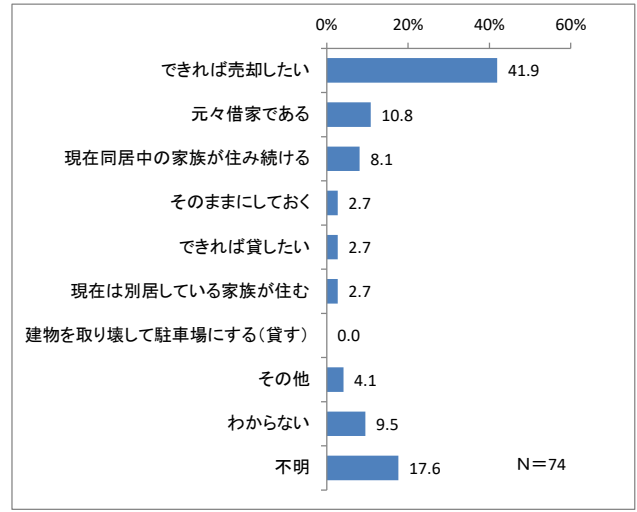
今後希望する居住形態としては、「このまま住み続ける」とする回答が約半数を占めるが、「改修やリフォームをして住む」「新たに住宅、マンションを購入」「今の場所に建替え、増改築して住む」を合わせると2割程度となっており、こうしたニーズに対応するため、住宅取得支援や、マンション建設のまちなかへの誘導を通じ、流出防止を図っていく必要がある。

また、まちなかでの居住に対する強い意向はみられるものの、一部には「転居したい・転居せざるを得ない」という声もあり、中心市街地内外への住み替え時には、約4割が現在の住居を売却したいという意向を持っている。当該住宅の状態にもよるが、こうした将来見通しに対応するため、中古住宅取得支援や隣接地購入による建替え支援を図りながら、空き家化・空き地化の防止に努める必要がある。

今後希望する居住形態



住み替える場合における現在の住まいの処理



〔３〕前計画に掲げた事業の成果と課題

（１）前計画の概要

高岡市では、平成 12 年度から概ね 10 年間を計画期間として、旧計画を策定し、中心市街地活性化に取り組んできた。

平成 18 年の中心市街地活性化法の改正を受け、旧計画では十分な成果が挙げなかった、観光地や商店街の回遊性の向上やまちなか居住の誘発、空き店舗の開業、公共交通の利便性向上など計画内容を見直し、高岡開町以来 400 年の歴史・文化資産と現代的な都市機能に満たされた居心地の良さと賑わいが調和よく織合わさった高岡の地域特性を生かしたまちづくりに取り組むため、平成 19 年 11 月に、計画の国の認定を受け、中心市街地活性化の施策推進に積極的に取り組んできた。

平成 24 年 3 月に新たに計画の認定を受け、「光り輝くまちなかの創生～400 年の資産を守り、育み、繋ぐ～」を目指して各事業を実施し、高岡にしかない歴史・文化資産の魅力を高めるとともに、中心商店街の魅力向上を図り、中心市街地の賑わい創出、交流人口の拡大を図っているところである。

計画期間は平成 24 年 4 月から平成 29 年 3 月の 5 年間とし、計画最終年次における目標達成項目として以下の 3 つを設定した。

【目標 1】歴史・文化資産の活用によるまちなか交流人口の拡大

数値目標＝主要観光施設における観光客入込み数：138 万人

（当初比較 21 万人増）

【目標 2】まちなか居住の推進

数値目標＝中心市街地における居住人口：16,500 人（当初比較 140 人増）

【目標 3】中心商店街の賑わいの創出

数値目標＝中心商店街（6 地点）における平日・休日の歩行者・自転車通行量の

平均値：14,900 人（当初比較 3,200 人増）

数値目標＝中心商店街（3 商店街）における空き店舗数

：15 件（当初比較 8 件減）

（２）事業の進捗状況

計画において掲げた 84 事業のうち、19 事業が完了、62 事業が実施中で、未実施の事業は 3 事業となっており、事業進捗率は 96.4%である（平成 28 年 10 月現在）。

未実施となっている事業の要因について、「金屋町鋳物工場跡地整備事業」については、調査の結果、建造物の劣化が著しく進んでおり、公共利用を図るには建物を取り壊すしかないというものであることがわかり、現在計画を中断している。「エルパセオ・マルシェ（仮称）開催事業」については、実施主体の人員確保等の実施体制が整わず実施に至っていない。また、「まちなか第 2 SOHO オフィス整備事業」については、既存の SOHO 支援オフィスに長期間空室が発生しており、新たな需要が見込めない状況

であったため、事業に着手できていない。

なお、金屋町においては、新たな場所での鋳物師町工房（仮称）の整備や、SOHOについては、近年満室となったことから新たな施設整備について、新計画で取り組むこととしている。

前計画における事業の実施状況（平成 28 年 10 月現在）

No.	事業名	事業期間 (年度)	進捗状況
1	高岡古城公園整備事業	H24	完了
2	高岡御車山会館建設事業	H24～H27	完了
3	平成の御車山制作事業	H24～	実施中
4	万葉線延伸部施設整備事業（高岡駅地区）	H22～H25	完了
5	高岡駅交通広場整備事業（万葉線延伸部走行空間整備事業〔（万葉線）路面電車走行空間、交通広場整備事業〕）	H19～H25	完了
6	高岡駅北口駅前広場整備事業（高岡駅佐加野線（北口駅広））	H16～	実施中
7	高岡駅北口歩行者専用道（人工デッキ）整備事業	H16～H25	完了
8	高岡駅前東自転車駐車場整備事業	H22～	実施中
9	金屋町鋳物工場跡地整備事業		未実施
10	都市計画道路桜馬場長慶寺線整備事業	H16～H24	完了
11	都市計画道路高岡駅佐加野線整備事業	H23～H25	完了
12	瑞龍寺保存修理事業	H24～	実施中
13	金屋町重要伝統的建造物群保存地区保存修理事業	H25～	実施中
14	前田利長墓所保存修理事業	H24～	実施中
15	高岡城跡詳細調査事業	H20～H24	完了
16	山町筋重要伝統的建造物群保存地区保存修理事業	H13～	実施中
17	高岡御車山保存修理事業	H17～	実施中
18	中心市街地ストリート回遊計画事業	H24～H27	完了
19	都心エリア土地利用検討調査事業	H24～H25	完了
20	金屋町観光駐車場・トイレ整備事業	H26～H27	完了
21	高岡子育て支援センター運営事業	H23～	実施中
22	高岡市鋳物資料館運営事業	H19～	実施中
23	重要文化財菅野家住宅運営事業	H10～	実施中
24	高岡市土蔵造りのまち資料館運営事業	H14～	実施中
25	ウイング・ウイング高岡運営事業	H16～	実施中
26	まちなか住宅取得支援事業	H19～	実施中
27	まちなか耐震住宅リフォーム支援事業	H21～	実施中
28	まちなか共同住宅建設促進事業	H19～	実施中
29	まちなか優良賃貸住宅補助事業	H19～	実施中
30	池の端景観形成重点地区建物修景等助成事業	H21～	実施中

31	坂下町通り景観づくり住民協定地区修景等助成事業	H22～	実施中
32	大規模小売店舗立地法の特例措置	H19～	実施中
33	観光地における開業支援事業	H20～	実施中
34	たかまちプロムナード事業	H24～	実施中
35	大学連携による伝統・文化再生事業	H19～	実施中
36	工芸都市高岡クラフト展開催事業	S61～	実施中
37	金屋町楽市開催事業	H20～	実施中
38	瑞龍寺ライトアップ事業	H12～	実施中
39	芸文ギャラリー運営事業	H18～	実施中
40	まちなかギャラリー事業	H18～	実施中
41	中心商店街活性化センター「わろんが」運営事業	H18～	実施中
42	中心市街地における開業支援事業	H20～	実施中
43	高岡御車山祭	従前より	実施中
44	「高岡御車山」臨時山倉設置事業	H19～	実施中
45	中心市街地における季節ごとの大型イベント開催事業	従前より	実施中
46	中心商店街活性化イベント開催事業	従前より	実施中
47	文化遺産活用イベント開催事業	従前より	実施中
48	シルバーサロン坂下小路運営事業	H13～	実施中
49	まちなか情報発信事業	H14～	実施中
50	コロッケのまちづくり事業	H16～	実施中
51	個別商店街の活性化事業	従前より	実施中
52	中心市街地における既存店舗リニューアル支援事業	H20～	実施中
53	朝市・夕市の開催	従前より	実施中
54	元気たかおか未来会議の開催	H19～	実施中
55	御旅屋賑わい創出事業	H22～	実施中
56	高岡駅周辺にぎわい創出事業	H23～H25	完了
57	新高岡ステーションビル建設事業	H24～H25	完了
58	中心商店街ミニ拠点開発事業	H26～	実施中
59	文化芸術創造都市モデル事業	H24～	実施中
60	高岡駅地下街リニューアル事業	H24～H26	完了
61	たかおか未来WEB商店街事業	H23～H25	完了
62	TR@P事業	H23～	実施中
63	セカイカメラ設置事業	H23～H26	完了
64	食のブランド化推進事業	H23～	実施中
65	新幹線開業記念広告宣伝事業	H25～	実施中
66	エルパセオ・マルシェ(仮称)開催事業		未実施
67	賑わい施設魅力向上事業	H24	完了
68	工房「手わざ」運営事業	H15～H24	完了
69	(仮称)高岡まちなか再生基金事業	H27～	実施中

70	「近世高岡の文化遺産を愛する会」の活動	H18～	実施中
71	フィルムコミッション事業	H13～	実施中
72	たかおか観光戦略ネットワーク事業	H17～	実施中
73	コンベンション開催支援事業	H19～	実施中
74	まちの駅ネットワーク事業	H18～	実施中
75	観光バス市営駐車場料金補助事業	H19～	実施中
76	コミュニティバス事業	H13～	実施中
77	お祭りシャトルバス事業	H24～	実施中
78	レンタルサイクル事業	H17～	実施中
79	中心市街地におけるオフィス開設支援事業	H20～	実施中
80	越中・飛騨観光圏事業	H22～H26	完了
81	まちなか第2SOHO オフィス整備事業		未実施
82	高岡クラフト市場街開催事業	H24～	実施中
83	高岡駅前東3街区再開発事業	H26～	実施中
84	ウイング・ウイング高岡交流スペース活用事業	H25～	実施中
総事業数 84（うち完了 19 実施中 62 未実施 3） ※96.4%が完了あるいは実施中			

（３）主な事業の成果と課題

①「歴史・文化資産の活用によるまちなか交流人口の拡大」に資する事業

i) 全体評価

高岡古城公園整備事業や高岡御車山会館建設事業などのハード事業や、たかまちプロムナード事業や文化遺産群を活用した各種イベントなどのソフト事業など様々な事業に取り組み、高岡にしかない歴史・文化資産の魅力を高め、交流人口の拡大を図ってきた。

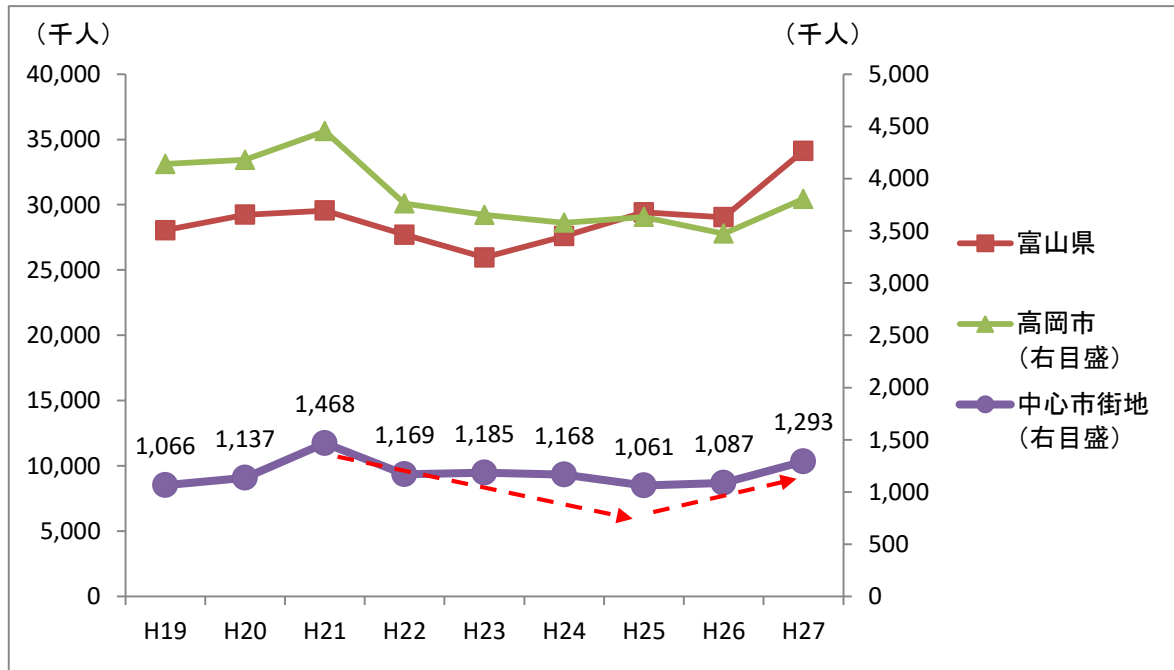
平成 27 年終了時点において、中心市街地における主要観光施設の観光客入込数は 1,293 千人に増加し、基準年となる平成 22 年との比較では 125 千人の増加（10.6%増）となり、目標数値に近い水準に達した。

特に、平成 27 年には、3 月 14 日の北陸新幹線の開業に続き 4 月 25 日には、重要有形・無形民俗文化財の高岡御車山を通年観覧できる高岡御車山会館が開館した。これまで、たかまちプロムナード事業や中心市街地ストリート回遊計画事業に取り組み、まちの特徴を活かした歩いて楽しいまちづくりを進めてきたところであり、首都圏を始めとした観光客が中心市街地を訪れ、複数の施設を巡ることで回遊性が生まれつつあり、観光客入込数は、前年比 19%増の入込数となった。

また、平成 27 年 4 月、中心市街地を中心とした 37（当時は 30）の構成文化財とそれらを結ぶ歴史ストーリーが文化庁より「日本遺産」の認定を受け、現在、これらを活用する様々なソフト事業を展開している。更には、平成 28 年 12 月に「高岡御車山祭の御車山行事」が、全国 33 件の「山・鉾・屋台行事」を構成する行事の 1 つとして、「ユネスコ無形文化遺産」に登録されたところであり、今後も観光客

入込数の増加基調が続くと考えられる。

観光客入込み数の推移



中心市街地における主要観光施設ごとの観光客入込み数

		H22	H23	H24	H25	H26	H27	目標値
古城公園		830,400	883,100	877,500	772,900	821,500	846,000	946,400
瑞龍寺		230,030	212,934	201,400	197,950	176,690	268,388	245,450
高岡大仏		93,700	77,440	75,500	75,500	75,500	105,700	100,000
山 町 筋	菅野家	4,574	2,657	3,200	3,689	2,820	4,299	44,282
	土蔵造りのまち資料館	5,928	4,269	4,902	4,860	4,475	5,668	
	高岡御車山会館	—	—	—	—	—	55,614	
金屋町（鑄物資料館）		4,116	4,489	5,589	5,634	5,970	7,814	7,046
施設計		1,168,748	1,184,889	1,168,091	1,060,533	1,086,955	1,293,483	※1,379,678

※北陸新幹線開業効果による観光施設全体の増加目標値 36,500 人を含む。

多くの主要観光施設において、平成 22 年次と比較して平成 27 年次の入込数が増加していることや、市民アンケートにおいて観光地としての魅力向上を評価する回答が多くみられ、市民の間で観光による中心市街地の活性化が実感できる状況になっていることを踏まえれば、「歴史・文化資産の活用によるまちなか交流人口の拡大」にかかる各種事業の実施は、それらが複合的に関連し、中心市街地活性化に大きく貢献したと評価することができる。

ただし、山町筋においては、平成 23 年の東日本大震災以降に落ち込んだ需要（特に団体）が回復しきれておらず、また平成 27 年 3 月の北陸新幹線開業に合わせ、同年 4 月に高岡御車山会館がオープンし、大勢の来場者に恵まれたものの、既存の菅野家と土蔵造りのまち資料館は、大通りを挟んで反対側に位置しており、若干距

離が離れていることから、波及効果は限定的であった。

ii) 主な事業の実施成果

ア. 高岡古城公園への観光客数の増加

■高岡古城公園整備事業（事業主体名：高岡市）

事業完了時期	平成 24 年度【済】
事業概要	高岡市の歴史的資産である高岡古城公園の園路の舗装整備や施設の改修を行うとともに、水濠の水質改善を進めることにより回遊性の向上や良好な景観形成を図る。
事業効果及び進捗状況	前計画から実施してきた高岡古城公園整備事業が平成 24 年度で完了した。この事業の実施により高岡古城公園の観光客入込数は 946 千人への増加を見込んでいたところであるが、実際は平成 22 年の 830 千人から、平成 24 年には 878 千人への増加であった。 その後、平成 25 年は 773 千人に落ち込んだが、平成 26 年は 822 千人、平成 27 年は 846 千人に回復している。

■高岡城跡詳細調査事業（事業主体名：高岡市）

事業完了時期	平成 24 年度【済】
事業概要	高岡城跡の国史跡への指定を目指して、遺構・遺物資料、文献資料等の調査からなる、高岡城の学術的価値や特徴を明らかにするための学術調査を行う。
事業効果及び進捗状況	前計画から実施してきた高岡城跡詳細調査事業が平成 24 年度で完了した。平成 27 年 3 月 10 日に国史跡に指定されたことから、高岡城跡の学術的価値が証明され、観光地としての魅力が向上し、平成 27 年の高岡古城公園の観光入込み客数の増加に寄与した。

イ. 山町筋（菅野家住宅、土蔵造りのまち資料館）への観光客の増加

■高岡御車山会館建設事業（事業主体名：高岡市）

事業完了時期	平成 27 年度【済】
事業概要	重要有形・無形民俗文化財の高岡御車山を通年観覧できる展示館を建設し、本市の観光拠点、中心市街地の活性を図り、魅力ある観光のまちづくりを推進する。
事業効果及び進捗状況	高岡御車山会館は、平成 27 年 4 月 25 日に開館し、年間入場者数は、55,614 人であった。平成 27 年の山町筋全体の観光客は 65,581 人であり、本事業が大きく寄与した。

■平成の御車山制作事業（事業主体名：高岡市）

事業完了時期	平成 29 年度【実施中】
事業概要	高岡で守られてきたものづくりの伝統と技術を次世代へ継承し、また、広く全国へ発信するため、高岡に息づく金工・漆工・木工等の伝統工芸技術の粋

	を集めた平成の御車山を制作する。
事業効果及び進捗状況	平成の御車山制作事業は平成 29 年度に完了する予定としており、制作過程を高岡御車山会館において順次公開を行っている。平成 27 年の山町筋全体の観光客は 65,581 人であり、本事業が大きく寄与した。

ウ. 金屋町（鋳物資料館）への観光客の増加

■金屋町重要伝統的建造物群保存地区保存修理事業（事業主体名：金屋町住民など（伝建地区内での土地・建物所有者））

事業完了時期	平成 25 年度～【実施中】
事業概要	金屋町の伝統的建造物等の修理及び修景事業を実施し、歴史的景観の向上や賑わいの創出を図る。
事業効果及び進捗状況	金屋町重要伝統的建造物群保存地区保存修理事業は継続的に実施している。金屋町（鋳物資料館）の観光客は約 3,700 人増加しており、本事業が寄与したと考えられる。

■金屋町鋳物工場跡地整備事業（事業主体名：高岡市）

事業完了時期	【未】
事業概要	高岡鋳物発祥の地・金屋町に残り、鋳物・銅器産業を象徴する遺産である鋳物工場の復元・修理に取り組み、資料保存及び見学・体験交流施設として活用を図る。
事業効果及び進捗状況	金屋町鋳物工場跡地整備事業については、調査の結果、建造物の劣化が著しく進んでおり、公共利用を図るには建物を取り壊すしかないというものであることがわかり、計画を中断していることから、事業効果は見込めない。

■金屋町楽市開催事業（事業主体名：金屋町楽市実行委員会）

事業完了時期	平成 20 年度～【実施中】
事業概要	高岡の地場産業である銅器工芸を生活空間に生かした、生活、工芸、産業が同居するゾーンミュージアムイベントを金屋町で開催する。富山大学芸術文化学部が持つ知的財産と高岡に息づく伝統技術の融合を図り、新たなものづくりの在り方を発信する。
事業効果及び進捗状況	金屋町楽市開催事業は継続的に実施しており、イベント来場者数は平成 22 年 23,600 人から平成 27 年 26,000 人に増加している。金屋町（鋳物資料館）の観光客も約 3,700 人増加しており、本事業が寄与したと考えられる。

■金屋町観光駐車場・トイレ整備事業（事業主体名：高岡市）

事業完了時期	平成 27 年度【済】
事業概要	金屋町における観光客の増大と滞留時間の延長を図るため、金屋町の近隣において、観光バスや普通車を停める駐車場とトイレを整備する。

事業効果及び進捗状況	金屋町観光駐車場・トイレ整備事業は、平成 27 年度に大型バス 4 台が駐車可能なスペースを整備し、平成 28 年 1 月 22 日に供用を開始した。本事業により金屋町（鋳物資料館）への観光客の増加は 890 人を期待している。
------------	--

エ. 高岡大仏への観光客の増加

■たかまちプロムナード事業（事業主体名：たかまちプロムナード会議）

事業完了時期	平成 24 年度～【実施中】
事業概要	高岡市の公共交通の中心である JR 高岡駅を起点に末広町～御旅屋通り商店街を経て、高岡大仏前、坂下町商店街に至る通りに、地域資源や新たな素材を付加した、通りを特徴付ける事業に取り組み、中心市街地のストリートビジョンと商店街の顔づくりの事業を実施する。
事業効果及び進捗状況	御旅屋通り商店街では、安らぎスポットとしてベンチとテーブルを設置し、オープンカフェを実施しているほか、末広町商店街ではナイトバザールの開催、フラッグの設置、ウォーキング事業、坂下町商店街では、高岡大仏ライトアップ、フォトコンテストの開催、のれんの設置などの事業を実施しているところである。高岡大仏への観光客は増加しており、本事業が寄与していると考えられる。

オ. 中心市街地ストリート回遊計画事業による山町筋、金屋町、瑞龍寺の観光客の増加

■中心市街地ストリート回遊計画事業（事業主体名：高岡市）

事業完了時期	平成 27 年度【済】
事業概要	観光客が一定の時間内で楽しめるよう地域特性に応じたゾーニングを行い、歩く仕組みづくりのためのハード・ソフト事業を効果的に組み合わせてつなぎ、歩いて楽しめるまちを創る。
事業効果及び進捗状況	中心市街地ストリート回遊計画事業は、瑞龍寺道の整備が平成 26 年度で完了し、歩行系サインの整備及び山町金屋町道路整備が平成 27 年度で完了した。山町筋、金屋町、瑞龍寺の観光客は増加しており、本事業が寄与したと考えられる。

カ. 北陸新幹線開業による観光客増加

■新幹線開業記念広告宣伝事業（事業主体名：高岡市）

事業完了時期	平成 28 年度【実施中】
事業概要	北陸新幹線開業を契機とする本市への誘客を図るため、出向宣伝や招聘、広告をはじめとする各種 PR 事業に取り組む。
事業効果及び進捗状況	新幹線開業記念広告宣伝事業は、平成 28 年度まで実施することとしており、JR 時刻表及び JR 東日本車内誌「トランヴェール」への広告掲載、出向による観光 PR などを実施している。 北陸新幹線開業を機に観光客は増加しており、本事業が寄与していると考えられる。

■食のブランド化推進事業（事業主体名：高岡食のブランド推進実行委員会）

事業完了時期	平成 23 年度～【実施中】
事業概要	高岡の歴史、風土、食材等を踏まえた高岡らしい食を開発し、ホームページなどでの情報発信や、各種イベントでの出品、協力店舗での提供に取り組む。
事業効果及び進捗状況	食のブランド化推進事業は、「高岡昆布飯」や「高岡昆布スイーツ」などの提供により高岡の食のブランド化を推進しているところであり、継続して実施している。 北陸新幹線開業を機に観光客は増加しており、本事業が寄与していると考えられる。

■越中・飛騨観光圏事業（事業主体名：越中・飛騨観光圏協議会）

事業完了時期	平成 26 年度【済】
事業概要	「越中・飛騨観光圏整備実施計画」に基づき、富山県西部地域と岐阜県飛騨地域の観光素材を組み合わせ、磨き、育て、新たな観光ルートを形成し、国内外に地域の魅力を発信する。
事業効果及び進捗状況	越中・飛騨観光圏事業では、宿泊魅力の向上、観光資源の活用、情報提供の充実に向けて、セカンドスクール誘致や旅行会社の招聘、観光説明会の開催、ハイウェイキャンペーン等、各種事業を実施してきた。 北陸新幹線開業を機に観光客は増加しており、本事業が寄与したと考えられる。

iii) 計画策定に向けた課題と展望

前計画においても、観光イメージアップおよび中心市街地への観光客の呼び込みに一定の成果を上げており、各種取り組みの有効性が確認された。新計画においては、前計画で効果の認められた事業を継続するとともに、新幹線の開業効果も徐々に薄れることが想定されることから、更なる観光地の魅力向上に繋がる核となる施設の整備に取り組む必要がある。

さらに、「日本遺産」の認定や「ユネスコ無形文化遺産」の登録を契機として、歴史的建造物や伝統文化、工芸技術といった本市固有の特長を最大限に活かした取り組みや、増大しているインバウンド需要への対応を一層強化する必要がある。

なお、新計画における指標としては、数値の正確性を高め、より細やかな分析が行えるよう、入場料を徴収する施設を中心とする観光客入込数を新たな目標指標とする。

②「まちなか居住の推進」に資する事業

i) 全体評価

現行計画策定当初の予測を上回るペースで人口の減少が発生し、平成 27 年度終了時点において目標数値を下回っている。

特に、全市の人口減の約半数に相当する人口減が中心市街地に見られ、まちなか居住支援事業による居住者の増加・下支え（約 280 人）、支援事業によらない集合住宅の建設による人口増加・下支え（下関地区で約 50 人）効果が損なわれる結果となった。

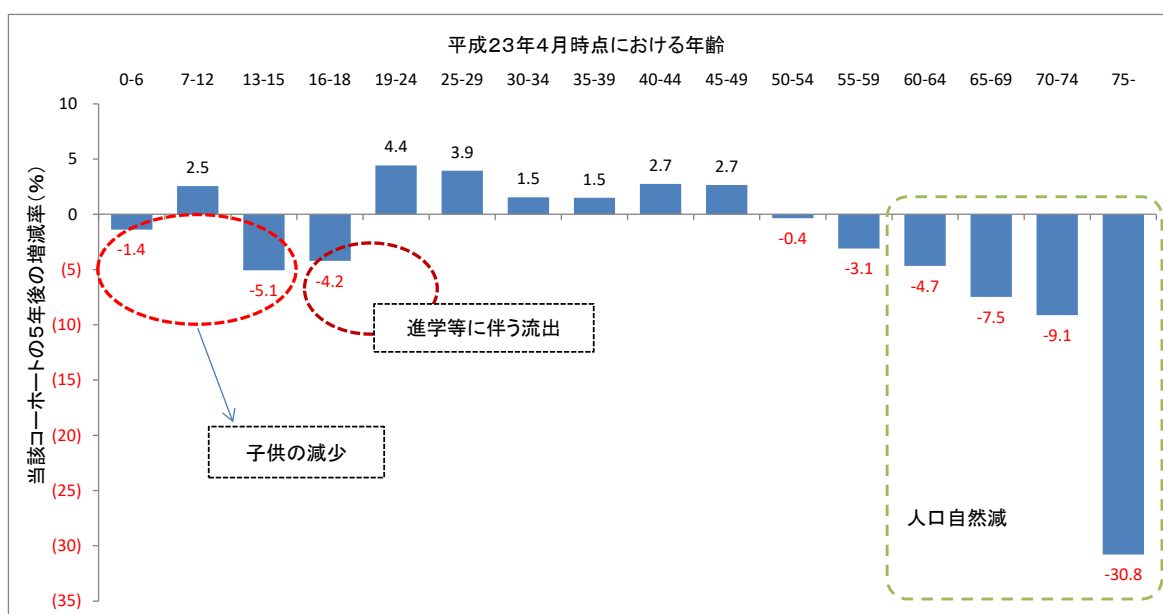
「まちなか居住支援事業」にかかる各種事業の実施は、平成 24 年度に 2 棟の共同住宅が建設され増加に転じるなど、中心市街地における居住人口の下支えに一定の役割を発揮したと考えられるものの、全体として中心市街地の居住人口を増加させるには至らなかった。

高岡市および中心市街地における人口の推移

	高岡市全体	中心市街地
平成 22 年度末居住人口	176,792 人	16,360 人
平成 27 年度末居住人口	174,492 人	15,230 人
平成 22 年度末→27 年度末人口減少率	▲1.3%	▲6.9%

人口増加に至らなかった原因は、中心市街地では高齢者の人口割合が全市平均よりも高く、自然減が発生しやすい状況が挙げられる。一方で、中心市街地が含まれる 6 地区における年齢階層による増減率を見ると、子供や高齢者は減少しているものの、19 歳～49 歳の年齢階層では増加しており、特に 20 代の若年世代で増加しており、中心市街地での居住が進んでいることが推察される。

中心市街地が含まれる 6 地区における年齢階層による増減率



※平成 23 年 4 月から 5 年間のコホートによる増減率

また、中心市街地の居住人口が減少する一方で、市民アンケート調査結果、まちなか居住者アンケート調査結果では、「景観整備」「歩行環境」といった市街地の居住環境について高い改善評価がなされているほか、北陸新幹線の開業効果により観光客が増加したとする回答が多くみられ、中心市街地に対するイメージも好転してきている。

これらは直接的な居住者増加の効果をもたらすものではないが、各種取り組みの実施によるまちなかの居住環境の改善、地域活性化の機運は地域住民に浸透しており、着実な成果を上げている。更には、シルバー世代のライフスタイルの変化（戸建てに固執しない）等により、マンション購入者が増えているなど、まちなか回帰の兆候も出てきている。

ii) 主な事業の実施成果

ア. まちなか居住支援事業による増加

■まちなか住宅取得支援事業（事業主体名：高岡市）

事業完了時期	平成 19 年度～【実施中】
事業概要	高岡市が認定した「まちなか居住区域」で、家屋の新築、建売やマンションの購入を行う個人に対し補助するもの。
事業効果及び進捗状況	まちなか住宅取得支援事業は、平成 24 年から 27 年度までに延べ 105 件と見込みを上回る利用実績があり、事業効果を現してきている。本事業により、居住人口は 250 人の増加を見込んでいたところ、27 年度までに約 280 人の増加・下支えに寄与しており、引き続き事業を実施している。

イ. まちなか共同住宅建設促進事業による増加

■まちなか共同住宅建設促進事業（事業主体名：高岡市）

事業完了時期	平成 19 年度～【実施中】
事業概要	高岡市が認定した「まちなか居住区域」で、一定要件を踏まえた 4 戸以上のアパート、マンション等を建築した者に対し補助するもの。
事業効果及び進捗状況	まちなか共同住宅建設促進事業により、平成 24 年度には 2 棟の共同住宅が建設された。平成 28 年度にも活用予定が見込まれ、事業効果を現してきている。居住人口の増加に寄与していることから、引き続き事業を実施している。

ウ. 中心商店街ミニ拠点開発事業による増加

■中心商店街ミニ拠点開発事業（事業主体名：民間）

事業完了時期	平成 30 年度【実施中】
事業概要	本地区は、JR 高岡駅前の中心商店街のメイン通りに面した街区の一面を成している。周辺は、昭和 30 年代の防火建築帯として整備された建物が並んでいるが、これらは区分所有のため、建て替えが進まず老朽化が進んでいる。このため、商業施設及び住居の複合施設に再編するとともに、来街者の利便

	性に寄与する公益施設を整備することでまちなかの賑わい創出及びまちなか居住の支援を図る。
事業効果及び進捗状況	中心商店街ミニ拠点開発事業は、現在、地権者等による協議会で整備計画を策定中であり、平成 29 年 2 月に着工する予定である。現時点の計画では、商業・公益施設とあわせ 98 戸のファミリータイプのマンション整備を行い、平成 30 年度に完了する予定であることから、計画期間内での事業効果は見込めない。

iii) 計画策定に向けた課題と展望

中心市街地において居住人口の増加が、歩行者通行量の増加につながり、商業をはじめとした様々な経済活動に好影響を及ぼすことから、居住者を増やすことが賑わい創出のための不可欠の要素である。したがって、まちなか居住の推進は従前の計画に引き続いて取り組んでいく必要がある。

中心市街地では、下関地区を除いて高齢者の人口割合が 3 割以上となっていることから、人口の自然減少が発生しやすい環境にはあるが、朝市・夕市の開催や日常生活に必要な店舗誘致を通じて生活利便を提供し、生活利便低下による高齢者の域外流出を防止するとともに、若年層、子供同居世帯の居住に適した魅力ある商業空間や子育てしやすい環境などの住環境の創出を引き続き実施していく必要がある。

平成 29 年春には、白金駐車場跡地に賃貸マンションが、平成 31 年春には、「中心商店街ミニ拠点開発事業」として事業を推進してきた末広西地区での分譲マンションと商業・公益施設の複合ビルが完成する見込みであり、更には高岡駅前東地区においてもマンション建設が見込まれるなど、まちなかでの集合住宅の建設の動きも活発化している。

一方で、中心市街地では狭隘な土地に古い住宅が密集し、住居と空き家が混在していることに加え、地籍境界の未確定、借地権や固定資産税等の問題により、まとまった広さの敷地を確保することが困難なことから、空き家について利活用を含めた総合的な対策や、まちなかでの防災対策の強化に取り組む必要がある。

なお、新計画における指標としては、取り組みの成果がより反映される「居住人口の社会増減」を新たな目標指標とする。

③「中心商店街の賑わいの創出」に資する事業

ⅰ) 全体評価

ア. 中心商店街(6地点)における平日・休日の歩行者・自転車通行量の平均値

平成 27 年における中心商店街(6地点)の歩行者・自転車通行量は、基準となる平成 22 年比で 3,902 人/日(平日・休日平均)増加しており、目標数値に到達した。

地点別にみると、高岡駅前で大幅に増加したが、それ以外の地点では軒並み減少している。特に高の宮通りと御旅屋通りの減少割合が大きくなっている。

中心商店街(6地点)における平日・休日の歩行者・自転車通行量推移

地点	平成 22 年	平成 27 年	増減率
高岡駅前※	2,327 人	9,845 人	+323%
末広通り(東側)	1,608 人	1,005 人	▲37%
末広通り(西側)	2,141 人	1,556 人	▲27%
高の宮通り	914 人	497 人	▲45%
末広坂通り	1,981 人	1,273 人	▲35%
御旅屋通り	2,677 人	1,374 人	▲48%
6 地点合計	11,648 人	15,550 人	+33%

※高岡駅前の調査地点は、22 年度は駅前地下、27 年度は人工デッキ

他の地点の通行量が減少しているなか、高岡駅前のみが大幅に増加しており、「高岡駅周辺整備事業」については、歩行者・自転車通行量の増加に大きく貢献したと評価することができる。

一方、中心市街地の回遊性を高めるための「たかまちプロムナード事業」や「中心市街地ストリート回遊計画事業」については、観光地周辺の通行量を増加させる効果は見られたものの、観光客は観光地周辺の駐車場まで直接車で行き、観光地だけを見て次の目的地へと向かうといった行動パターンが多く、観光客が商店街へと回遊するまでには至っておらず、中心商店街では十分な効果は出ていない。

また、中心市街地における各種イベント、朝市・夕市・フリーマーケットは、中心市街地の賑わいを創出している要素として評価が高いが、イベント開催の有無によって通行量は大きく左右され、恒常的な歩行者・自転車通行量の維持・増加に結びついていない。

更には、「中心商店街ミニ拠点開発事業」が未だ完成に至っておらず、中心市街地内の居住人口が減少していることなど、中心商店街の来街者数自体を直接底上げする事業については、十分な成果が得られなかった。

イ. 中心商店街(3商店街)における空き店舗数

前計画実施後、平成 27 年 10 月までに中心商店街(3商店街)の空き店舗数は 23 店舗から 21 店舗に減少したが、目標値の 15 店舗には届いていない(データ 15 ページ参照)。

「中心市街地における開業支援事業」により、空き店舗の営業店舗化、既存店舗

の空き店舗化防止が図られ、飲食店やエステティックサロン、ハワイアン雑貨店といった新たなジャンルの店舗が開業するなど中心商店街の魅力向上に繋がった。併せて、北陸新幹線の開業を契機に、空き店舗調査の対象となっていない商店街や観光地周辺での開業も進んでいる。また、新しく開業した高岡駅に隣接する商業施設やリニューアルした地下街では、開業支援事業によって多くのテナント入居が促進され、拠点性の維持・向上に貢献している。

一方で、後継者不足等により廃業する店舗もあり、商店の一般住宅化による商店数の減少も進んでおり、空き店舗数の減少が賑わい創出につながっているとは、一概に言えない側面もある。

ii) 主な事業の実施成果

・中心商店街(6地点)における平日・休日の歩行者・自転車通行量に寄与する事業
ア. 高岡駅周辺整備事業による効果

■高岡駅交通広場整備事業（万葉線延伸部走行空間整備事業〔（万葉線）路面電車走行空間、交通広場整備事業〕）（事業主体名：高岡市）

事業完了時期	平成25年度【済】
事業概要	高岡駅の公共交通機関相互の乗換利便性の向上を図るため、万葉線高岡駅前電停と、JR高岡駅の近接化のための交通広場整備を行う。
事業効果及び進捗状況	本事業を含めた高岡駅周辺整備事業の実施により 560 人の歩行者・自転車通行量の増加を見込んでいたところ、本事業と新高岡ステーションビル建設事業と高岡駅地下街リニューアル事業の完了により、5,000 人以上の増加があり、周辺地区の賑わいや回遊性の向上に寄与した。

■高岡駅北口駅前広場整備事業（高岡駅佐加野線（北口駅広））（事業主体名：高岡市）

事業完了時期	平成28年度【実施中】
事業概要	高岡駅の公共交通機関相互の乗換利便性の向上、南北市街地の連携強化、安全で快適な歩行空間の確保等を図るため、ロータリーの見直し等による北口駅前広場の再整備を行う。
事業効果及び進捗状況	本事業を含めた高岡駅周辺整備事業の実施により 560 人の歩行者・自転車通行量の増加を見込んでいたところ、本事業及び新高岡ステーションビル建設事業、高岡駅地下街リニューアル事業の完了により、5,000 人以上の増加があり、周辺地区の賑わいや回遊性の向上に寄与した。なお、一部のバス乗降場および地下街への出入り口については、当初の計画より延長し、引き続き整備を行っている。

■高岡駅北口歩行者専用道（人工デッキ）整備事業（事業主体名：高岡市）

事業完了時期	平成25年度【済】
事業概要	高岡駅の公共交通機関相互の乗換利便性の向上、南北市街地の連携強化、安全で快適な歩行空間の確保等を図るため、北口歩行者専用道の整備を行う。
事業効果及び	本事業を含めた高岡駅周辺整備事業の実施により 560 人の歩行者・自転車

進捗状況	通行量の増加を見込んでいたところ、本事業及び新高岡ステーションビル建設事業、高岡駅地下街リニューアル事業の完了により、5,000 人以上の増加があり、周辺地区の賑わいや回遊性の向上に寄与した。
------	--

イ. 新高岡ステーションビル建設事業、高岡駅地下街リニューアル事業による効果

■新高岡ステーションビル建設事業（事業主体名：㈱高岡ステーションビル）

事業完了時期	平成 25 年度【済】
事業概要	富山県西部地域の交流結節点である JR 高岡駅に隣接する高岡ステーションビルの全面改築を行う。
事業効果及び進捗状況	本事業と高岡駅地下街リニューアル事業の実施により 2,290 人の歩行者・自転車通行量の増加を見込んでいたところ、本事業及び高岡駅周辺整備事業の完了により、5,000 人以上の増加があり、周辺地区の賑わいや回遊性の向上に寄与した。

■高岡駅地下街リニューアル事業（事業主体名：㈱高岡ステーションビル、高岡市）

事業完了時期	平成 26 年度【済】
事業概要	高岡駅北口駅前広場整備に合わせた改修のため、一時閉鎖・再整備の後、新規店舗及び公共スペースを入れて再開する。
事業効果及び進捗状況	本事業と新高岡ステーションビル建設事業の実施により 2,290 人の歩行者・自転車通行量の増加を見込んでいたところ、本事業及び高岡駅周辺整備事業の完了により、5,000 人以上の増加があり、周辺地区の賑わいや回遊性の向上に寄与した。

ウ. 高岡子育て支援センター運営事業による効果

■高岡子育て支援センター運営事業（事業主体名：高岡市）

事業完了時期	平成 23 年度～【実施中】
事業概要	御旅屋セリオ内に設置されている子育て支援センターにおいて、子育て親子の交流促進や遊びの場の提供、育児相談、子育て関連情報の提供等、子どもの健やかな育成に関する支援事業を総合的に行う。
事業効果及び進捗状況	子育て支援センターには、1 カ月当たり約 3,000 人が利用しており、御旅屋セリオや周辺商店街の賑わいや回遊性の向上に寄与している。

エ. たかまちプロムナード事業、中心市街地ストリート回遊計画事業による効果

■たかまちプロムナード事業（事業主体名：たかまちプロムナード会議）【再掲】

事業完了時期	平成 24 年度～【実施中】
事業概要	高岡市の公共交通の中心である JR 高岡駅を起点に末広町～御旅屋通り商店街を経て、高岡大仏前、坂下町商店街に至る通りに、地域資源や新たな素材を付加した、通りを特徴付ける事業に取り組み、中心市街地のストリートビジョンと商店街の顔づくりの事業を実施する。

事業効果及び進捗状況	御旅屋通り商店街では、安らぎスポットとしてベンチとテーブルを設置し、オープンカフェを実施しているほか、末広町商店街ではナイトバザールの開催、フラッグの設置、ウォーキング事業、坂下町商店街では、高岡大仏ライトアップ、フォトコンテストの開催、のれんの設置などの事業を実施しているところである。本事業及び中心市街地ストリート回遊計画事業により、歩行者・自転車通行量の増加は 220 人を見込んでいたが、中心商店街においては十分な効果は上がっていない。
------------	--

■中心市街地ストリート回遊計画事業（事業主体名：高岡市）【再掲】

事業完了時期	平成 27 年度【済】
事業概要	観光客が一定の時間内で楽しめるよう地域特性に応じたソーニングを行い、歩く仕組みづくりのためのハード・ソフト事業を効果的に組み合わせつつなぎ、歩いて楽しめるまちを創る。
事業効果及び進捗状況	中心市街地ストリート回遊計画事業は、瑞龍寺道の整備が平成 26 年度で完了し、歩行系サインの整備及び山町金屋町道路整備が平成 27 年度で完了した。本事業及びたかまちプロムナード事業により、歩行者・自転車通行量の増加は 220 人を見込んでいたが、中心商店街においては十分な効果は上がっていない。

オ. 中心商店街ミニ拠点開発事業による効果

■中心商店街ミニ拠点開発事業（事業主体名：民間）【再掲】

事業完了時期	平成 30 年度【実施中】
事業概要	本地区は、JR 高岡駅前を中心商店街のメイン通りに面した街区の一面を成している。周辺は、昭和 30 年代の防火建築帯として整備された建物が並んでいるが、これらは区分所有のため、建て替えが進まず老朽化が進んでいる。このため、商業施設及び住居の複合施設に再編するとともに、来街者の利便性に寄与する公益施設を整備することでまちなかの賑わい創出及びまちなか居住の支援を図る。
事業効果及び進捗状況	中心商店街ミニ拠点開発事業は、現在、地権者等による協議会で整備計画を策定中であり、平成 29 年 2 月に着工する予定である。現時点の計画では、商業・公益施設とあわせ 98 戸のファミリータイプのマンション整備を行い、平成 30 年度に完了する予定であることから、計画期間内での事業効果は見込めない。

・中心商店街（3 商店街）における空き店舗数の減少に寄与する事業

ア. 中心市街地における開業支援事業による効果

■中心市街地における開業支援事業（事業主体名：高岡市）

事業完了時期	平成 28 年度【実施中】
事業概要	中心市街地の魅力向上に寄与する店舗の進出を促進するため、空き店舗を活用した開業者及び空き店舗の所有者に対し、支援を行う。

事業効果及び 進捗状況	平成 24 年度以降の本事業の活用件数は、空き店舗数調査対象区域外を含め 60 件以上の活用実績（調査対象の 3 商店街では 10 件の活用実績）があり、中心市街地の空き店舗数の減少に寄与している。
----------------	---

iii) 計画策定に向けた課題と展望

ア. 中心商店街(6 地点)における平日・休日の歩行者・自転車通行量の平均値

通行量による賑わい創出においては、「高岡駅周辺整備事業」の実施により、高岡駅の交通結節点としての拠点性の向上及び南北市街地の一体化が図られ、高岡駅前において飛躍的に増加したことから、目標値を達成することができた。

しかしながら、北陸新幹線の開業に伴う特急列車の廃止の影響による乗降客数の減少により、高岡駅前においても通行量は減少傾向にあることから、高岡駅周辺においては、隣接する高岡駅前東地区の整備を進めるなど、更なる拠点性を高める取組みが必要である。併せて、通行量が増加した高岡駅や、観光客が増加している観光地周辺から中心商店街への回遊性を向上させる取組みが十分に機能しておらず、回遊促進に向けた取り組みを継続的に実施していく必要がある。

また、日常的に通行量を増加させる取組みとして、中心市街地内の居住者や昼間人口を増やすため、まちなか居住の推進と業務機能（オフィス）の誘導に引き続き取り組んでいくことが重要である。

なお、新計画における指標としては、北陸新幹線開業後のまちづくり、連携中枢都市圏における交流など、交流人口の拡大へと繋がる機会が増えることから、「歩行者通行量」は観光地周辺を含めた新たな目標指標とする。

イ. 中心商店街(3 商店街)における空き店舗数

中心商店街では、開業支援事業を活用した飲食店や物販店の開業があり、空き店舗数は減少し、新たなジャンルの店舗が開業するなど開業支援事業を中心にした取組みに一定の成果があったところである。しかしながら、店主の高齢化などによる閉店により商店数は減少したため、市民の意識の中では中心市街地の賑わい創出を感じることができないといった評価もある。

一方、観光地周辺では増加する観光客を目当てに、個性的な店舗の新規開業も相次いでおり、中心市街地への新たな誘客要因として機能し始めていることから、中心商店街においても、観光客を始めとした新たな顧客を呼び込み、回遊性の向上と滞在時間の延長につながるような魅力的な店舗を増やしていく必要がある。

したがって、新計画においては、引き続き開業支援事業に積極的に取り組み、制度の継続・拡充を図りながら、中心商店街及び観光地周辺での開業意欲を喚起するとともに、末広西地区や山町筋において店舗併設型の新たな施設を整備するなど、店舗数の増加による中心市街地の賑わい創出を図る必要がある。

なお、新計画における指標としては、事業の成果をより正確に評価するため、「新規開業店舗数」を新たな目標指標とし、中心商店街及び観光地周辺の賑わいの状況を把握できる目標指標とする。

〔４〕現状分析と課題の整理

（１）現状分析

中心市街地が置かれている状況、および課題については、事業実施成果、市民ニーズ、北陸新幹線の開業や連携中枢都市圏の取組み等の環境の変化を踏まえたうえで、新計画に結び付けていく必要がある。

中心市街地の現状認識を整理すると以下のとおりである。

分析項目	内 容
1. 高岡市及び中心市街地の位置づけ	①北陸新幹線が開業し、東京とは最速 2 時間 21 分で結ばれたが、高岡駅から南へ約 1.5 キロ離れた分離駅として新高岡駅が開業した。 ②道路網の整備が進んでいることに加え、富山市や金沢市をはじめ周辺都市との距離は全て 50 キロ圏内と移動が容易であり、日常の生活圏内として捉えられる。 ③国道や能越自動車道などが市域を縦横に走り、中心市街地内にある高岡駅を中心にあいの風とやま鉄道、ＪＲ、万葉線、バス等の公共交通が集中する呉西の交通結節点である。 ④人口の市外転出と車社会の進展に伴い、ロードサイド店や郊外の大型商業施設・スーパーの出店が進展し、呉西地域における高岡市の中心市街地が有する中心性は希薄化の傾向にある。 ⑤全市において、比較的立地の多い製造業を含めて全産業の事業所数が減少傾向にあり、特に中心市街地では減少が著しい。
2. 歴史文化資産の活用	①県内唯一の国宝・瑞龍寺をはじめ、文化財保護法に基づく指定文化財等の歴史・文化資産の観光資源が数多く集積しており、「日本遺産」の認定や「ユネスコ無形文化遺産」への登録もされた。 ②市民意識調査では、中心市街地の現状として歴史・文化資産を生かしたまちづくりに対し高い評価を得ている。 ③観光地としての知名度やイメージは向上しているが、観光拠点相互の連携による回遊性向上の仕掛け、滞在時間の延長と消費行動を促す手段（例：飲食店、土産店の立寄り場所の集積）が十分ではなく、歴史・文化が多数集積する強みが十分に発揮されていない。
3. 市街地の整備改善	①高岡市の中心市街地は、昭和 30 年代から 50 年代にかけて大規模な都市基盤整備事業が実施され、現在の中心市街地が形作られていった。その後、平成以降に、中心市街地の域内で 4 つの再開発事業により拠点整備が行われた。 ②平成 18 年から高岡駅周辺整備事業が実施され、高岡駅の乗り換え利便性の向上、南北市街地の一体化が図られた。 ③昭和の時代に整備された防災街区等の施設は老朽化し、その後、景気の停滞等の問題等から、まちの新陳代謝が進まない状況で

	あったが、近年高岡駅周辺においては、民間主導による再開発の動きが徐々に出始めている。
4. 都市福利施設の向上	①中心市街地には、小規模な行政サービス機関、医療機関のほか、高岡古城公園や生涯学習センター、子育て支援センターなどの拠点性の高い市民の憩い・学習の場が整っており、中心市街地において一定水準のサービスは提供されている。
5. まちなか居住の推進	①現在、まちなかに居住している方の多くは、まちなかでの生活を住みよいと感じており、できればまちなかでの居住を続けたいという意向もあわせ持っている。 ②中心市街地の空き地、空き家は高い水準であり、それらが点在し、まとまった土地を確保できないため、宅地開発が進まず、人口減少も引き続き進んでいる。 ③一方、高岡駅周辺においては集合住宅の建設の動きが活発化してきている。
6. 高齢化社会への対応	①中心市街地では、全市の傾向と比べて高齢化が進展しており、今後も全市を上回るペースでの人口減少が予想され、活力の低下が懸念される。
7. 中心商店街の活性化	①商店数、年間販売額など、商業活動を示すすべての指標において中心市街地（商業集積）の占める割合は減少している。 ②あわせて、事業所数・従業者数も減少しており、昼間人口の減少に繋がっている。 ③中心商店街は、買回り品を中心に高岡市全域を週末商圈としているが、そのウェートは年々低下している。 ④高岡駅周辺や観光地では歩行者通行量は増加しているものの、中心商店街では減少しており、回遊性が低い。 ⑤小売業の年間販売額が減少するなど中心商店街における賑わいが薄らいでいくなか、商業者は、経費削減や在庫圧縮に努めながら営業の維持存続に向けて努力している。一方で、営業期間の比較的短い店舗については、品揃えの充実や仕入先の開拓など事業意欲の高い商業者が多い。 ⑥市民意識調査では、中心市街地における商業環境、商業景観が悪化しているとする指摘が特に多く、商業機能の改善、回復が強く求められている。
8. まちづくり会社の役割	①まちづくり会社を担う末広開発(株)は、主にイベントを中心とした商店街の賑わいづくりに寄与している。主催事業と協賛事業をあわせると、ほぼ毎週、中心市街地における大小さまざまなイベントを開催（参加）している。 ②その他、ミニ拠点の管理運営など、まちの顔づくりに向けた活動をはじめ、空き店舗における入居希望者と大家とのマッチング、ホームページ等による情報発信、各種共同販促事業の開催

	など、幅広い活動を行っている。 ③このような活動実績により、まちづくり会社に対する中心商店街の信頼は厚く、また、新たに空き店舗となっていた歴史的町家の再生事業に取り組み始めており、まちづくり会社が主体となった多面的なまちづくり活動を一層推進することが必要である。
9. 公共交通機関の利便性の増進	① 公共交通の利用者は、減少傾向にあるが、高岡駅周辺は現在も1日あたり10,000人を超える人の日常の交通・交流結節拠点として重要な役割を担っている。 ② 広域交通の拠点である新高岡駅との一体的な活用を図る必要がある。

（２）課題の整理

新計画では前計画までに取り組んできた成果を更に高めていくことに加え、新たに富山県西部6市との更なる広域連携（連携中枢都市圏構想）や、新幹線時代における交流・交通結節機能の充実など新たな責任を果たしていくことを掲げ、その要として中心市街地を位置付ける。

これまでは、新幹線の開業を見据えた、行政主導のハード整備が中心となっていた面があるが、こうした戦略的な投資が、民間のホテルやマンション建設等に結びついてきているものと考えている。また現在、統合看護学校の建設をはじめとする駅前の開発を進めているが、これを契機に、銀行の本店機能の移転がなされることとなっており、「官から民へ」の好循環が生まれつつある。ただし、今はまだ「道半ば」であり、こうした状況を好機として、更なる民間投資を誘発し、効果を最大化できるよう、中心市街地の活性化を図っていく必要がある。

①魅力的な中心商店街の形成

高齢化等による担い手不足や大型店、ロードサイド店の進出、人口減少と少子高齢化などが相まって来街者が減少、これに比例して商店数、年間販売数も減少しており、中心商店街の活力は年々低下している。

「まちの顔」である中心商店街に賑わいを取り戻すためには、個々の商店主らの営業努力に加え、まちづくり会社や商工団体、地域住民や地場産業（農業も含む）従事者、行政などが一体となって、新規開業の促進や既存店舗のリニューアル支援などの、商店街の新たな担い手の確保に取り組み、商業機能および業務機能の充実を図る必要がある。

併せて、公共・公益機能の拡充や新たな拠点開発、特徴的なイベントを仕掛けていくことにより、「出かけていく理由」があるまちなかを創出していく必要がある。

②まちなか居住の推進

中心市街地は公共交通の利便性が高く、都市インフラ・福利施設が充実している

ことから、住民の生活満足度も高く、便利で快適な日常生活を営むことのできる地域である。

一方で、古い町家が密集し、間口が狭く奥行の長い家屋が多いことから、住環境上、住みよいとは言い難い物件も多く存在している。居住者が市の郊外や近隣他都市へ移り住む要因の1つとなっており、空き地、空き家の増加を招いていることから、中心市街地の人口の減少に繋がっているものと考えられる。

街区単位の小規模開発による共同住宅の建設促進や、隣接地の購入と隣接建築物の除却、リフォームに対する支援などの空き家対策を図ることにより、快適な居住環境の創出に努め、まちなかの居住性向上と居住者の増加に努める必要がある。

③まちなか防災力の向上

前述同様、中心市街地は住宅が密集するほか、狭隘な道路事情も住環境上の課題として挙げられる。

消防車や救急車などの緊急車両の進入にも難儀する地区もあり、災害時の対応に大きな支障が生じるだけでなく、そうした地区は転居・移住希望者からは敬遠され、現居住者も広い場所を求め去って行ってしまうことから、地区全体のコミュニティの維持・存続にも影響を及ぼしている。

こうしたことから、災害時に必要な避難路へ安全に逃げられる道路や広場を整備するとともに、耐震性・耐火性を上げる改修工事支援や老朽化建物の建て替え促進を図るなど、修復型のまちづくりによる防災性の向上を図る必要がある。

また、居住している方々が、日常の生活を継続可能な住環境整備を図るため、住民が主体的にまちづくりを進める意識の醸成も必要である。

まちなか防災モデル事業（博労地区）では、まちなか防災力向上を図ることを目的に、平成25年からワークショップが重ねられ、住民主体による防災まちづくり計画が策定された。このような活動から、自治会有志のメンバーを中心としたプロジェクトチームが結成され、課題解決に向けたアイデアや対策の検討がなされるなど、地域住民の主体的な活動へと発展している。

今後も、住民主体による取り組みを支援し、共創によるまちなかの防災対策を進めていく必要がある。

④交流人口の拡大

平成27年3月の北陸新幹線開業は、県外から多数の来訪者を促し、各観光地や飲食店、宿泊施設などに大きな恩恵をもたらした一方、分離駅により多くの特急利用者が中心市街地を経由しなくなったことにより、歩行者通行量の減少を招いている。新幹線開業効果も一過性のものであり、今後は真に選ばれ続ける観光地となるための、魅力の向上が必要である。

幸いにして、関係者らの不断の努力により、平成27年4月の日本遺産認定や平成28年12月のユネスコ無形文化遺産登録、高岡の特徴である「ものづくり」に注目が集まっていることなど、活かすべき契機は十分であることから、これらを活用した事業展開が必要である。

加えて、高岡市を含む富山県西部 6 市により連携中枢都市圏が形成され、広域連携による施策を強化していくこととしている。高岡市は 6 市の中では一番大きな規模を持ち、また、県西部の交通体系は高岡駅を中心に配されていることから、高岡市の中心市街地は、これまで以上に県西部 6 市の交流の要としての役割が求められ、かつ、その役割にふさわしい機能を備えていく必要がある。

〔5〕計画の基本方針

前計画の成果から、本市中心市街地の現状分析と課題を踏まえて、以下のとおりスローガン及び基本方針を定める。

（１）スローガン

高岡の開町以来 400 年の歴史・文化資産を生かし、現代的な都市機能に満たされた居心地の良さと賑わいを創出し、それらが調和よく織り合わさった高岡の地域特性を活かしたまちづくりに取り組むことで、誰もが憧れを持って住みたいまち、行きたいまちを実感できる光り輝くまちなかを創生するため、市民が共感できるスローガンを引き続き次のとおり定める。

【スローガン】 光り輝くまちなかの創生

～ 400 年の資産を守り、育み、繋ぐ ～

（２）基本方針

①行き交う人で賑わうまち

中心市街地には高岡市を代表する数多くの歴史的、文化的資産が保存、継承されている。近年においても、金屋町の重要伝統的建造物群保存地区への選定（平成 24 年）、高岡城跡（高岡古城公園）の国史跡指定（平成 27 年）、「加賀前田家ゆかりの町民文化が花咲くまち高岡一人、技、心」の日本遺産の認定（同年）、高岡御車山祭のユネスコ無形文化遺産登録（平成 28 年）と、対外的な評価は十分であり、この豊かな歴史的価値を活かした観光施策、地域振興策を展開していくことが重要である。

高岡市の基幹産業は製造業であり、観光産業が未熟であったが故に、県外からの来訪者に対し満足いくもてなしが出来ていたとは言い難いものの、北陸新幹線の開業や 2020 年の東京オリンピック・パラリンピックに伴うインバウンド需要なども組み合わせれば、中心市街地における観光業の伸びしろは十分にあるものと考ええる。

また、富山県西部地域における、地域交通体系が高岡市中心市街地に属する高岡駅を中心に形成されていること、北陸新幹線の停車駅が高岡市にだけあること、連携中枢都市圏の形成などにより、広域的な展開における中心市街地の役割と重要性が高まっている。

圏域ネットワークの一層の強化を図り、交流・交通結節機能の充実、教育・業務・医療の各分野における人材育成や域内交流、「歴史と文化」と「ものづくり」を活かした観光誘客などに取り組むことにより“行きたくなる”まちづくりを進め、交流人口の拡大を図り、行き交う人で賑わうまちなかを創出していく。

②住む人、働く人で賑わうまち

道路網の充実と車社会の進展、ライフスタイルの変化等に伴い、商業機能における中心市街地の中心性は相対的に低下し続けている一方で、居住性における住民の評価は高く、郊外部や周辺市街地に比べ都市インフラが充実していることは、今なお中心市街地に一定のアドバンテージを有しているものと考ええる。

また、少子高齢化や人口減少により、税収は低下している一方、市街地の拡大や多様な住民ニーズにより行政コストは増大しており、既存インフラが高度に集積する中心市街地を活用することは、コスト縮減と効率的でコンパクトなまちづくりを進めていくために必要なことであると考ええる。

一方で、資本力に優れ、高い水準の品物を安価に提供できる郊外の大型店と同じ路線で対抗するのではなく、顧客へのきめ細やかなサービスや中心商店街ならではの体験・サービスなど、商業環境においても、独自性の高いまちづくりや郊外店との差別化を図る取組みが必要となっている。

こうした社会情勢を踏まえ、また、まちなかの優位性を活かして居住人口の増加を図るため、道路改良や住宅改修支援など、住宅密集地の環境改善に取り組み、空き地・空き家の解消に努めるとともに、都市型の生活を志向する方や、公共交通を通勤手段とする方などをターゲットとする集合住宅の整備促進など、“住みたくなる”まちづくりを展開する。

加えて、商店街の空き店舗を活用した物販、飲食、サービス等やオフィスの新規開業を支援し、商業機能の充実や新規創業による創業活動の活性化を促進させ、居住者への生活サービスと来街者への魅力向上を図るとともに、民間活力と連動した、官民一体によるまちづくりを推進し、住む人、働く人で賑わうまちなかを創出していく。

現状分析・課題から導き出される基本方針の体系

《 現 状 分 析 》

《 課 題 》

《 基 本 方 針 》

